

りける人によみておくりける

年をへて住みこし里を出でていなばいとど深草野とやなりなむ

かへし

読人しらす

野とならば鶉と鳴きて年はへむかりにだにやは君はこざらむ

題しらす

我を君難波の浦に有りしかば憂きめをみつのあまと成りにき

この歌はある人むかし男ありけるをうなの男とはすなりに

ければ難波のみつの寺にまかりて尼になりてよみて男に遣

せりけるとなむいへる

かへし

難波潟うらむべきまも思ほえず何處をみつのあまとかはなる

今さらにとふべき人もおもほえず八重葎してかどさせりてへ

友だちの久しうまうでこざりけるもとによみて

遣しける

躬

恒

水の面におふるさ月の浮草のうきことあれや根を絶えてこぬ

人をとほで久しうありけるをりにあひうらみけ

ればよめる

身をすてて行きやしにけむ思ふより外なるものは心なりけり

むねをかのおほよりが越よりまうできたりける

ときに雪の降りけるを見ておのがおもひはこの

雪のごとくなむ積れるといひける折によめる

君がおもひ雪とつもらば頼まれず春より後はあらじと思へば

かへし

宗岳 六頼

君をのみおもひこしぢの白山はいつかは雪のきゆるときある

越なりける人に遣しける

紀貫之

思ひやるこしの白山しらねどもひとよも夢にこえぬ夜ぞなき

題しらす

讀人しらす

いざここに我が世はへなむ菅原や伏見の里のあれまくもをし

我が庵は三輪の山もと戀しくばとぶらひきませ杉たてるかど

喜撰法師

我が庵は都のたつみしかぞすむ世をうちやまと人はいふなり

讀人しらす

荒れにけりあはれ幾世の宿なれや住みけむ人の音づれもせぬ

奈良へまかりける時にあれたる家に女の琴ひき

良岑宗貞

けるをききてよみていれたりける

佗人のすむべき宿と見るなべになけきくははる琴の音ぞする

初瀬に詣づる道に奈良の京にやどれりけるとき

よめる

二條

人ふるす里をいとひてこしかどもならの都もうき名なりけり

題しらす

讀人しらす

世の中はいづれかさしてわがならむ行きとまるをぞ宿と定むる

逢坂のあらしの風はさむけれど行方しらねば佗びつつぞぬる

風の上にあるか定めぬ塵の身は行方も知らずなりぬべらなり

家をうりてよめる

伊勢

飛鳥川ふちにもあらぬわが宿もせに變りゆく物にぞありける

つくしに侍りける時にまかり通ひつつ暮うちけ

る人の許に京に歸りまうできてつかはしける

故郷は見しごともあるはず斧の柄のくちし所ぞこひしかりける

女ともだちと物語して別れて後につかはしける みちのく
あかざりし袖の中なかにや入りにけむ我がたましひのなき心地する

寛平の御時にもろこしのはう官にめされて侍り

ける時に東宮のさぶらひにてをのこども酒たう

べけるついでによみ侍りける

藤原ただふさ

なよ竹のよながきうへに初霜のおきるて物をおもふころかな

題しらす

讀人しらす

風ふけばおきつ白浪たつた山よはにやきみがひとりこゆらむ

或人この歌はむかし大和の國なりける人のむすめにある人

すみ渡りけるこの女おやもなくなりて家もわるくなりゆく

あひだこの男河内の國に人を相知りて通ひつつかれやうに

のみなりゆきけりさりけれどもつらげなるけしきも見えで

河内へいくごとに男のこゝろの如くにしつつかいだしやりけ
ればあやしと思ひてもしなきまにことごころもやあるとう
たがひて月のおもしろかりける夜河内へいくまねにて前裁
の中にかくれて見ければ夜ふくるまで琴をかきならしつづ
うちなげきてこの歌をよみてねにければこれを聞きてそれ
よりまたほかへもまからずなりにけりとなむいひつたへた
る

たがみそぎゆふつけ鳥どりかから衣たつ田の山やまにうちおりはへてなく

わすられむ時しのべとか濱ぞい千鳥とらゆくへもしらぬ跡をとどむる

貞觀の御時萬葉集はいつばかりつくれるぞと問

はせ給ひければよみて奉りける

文屋ありする

神無月時雨降りおけるならの葉の名におふ宮みやの古ふることぞこれ

寛平の御時歌奉りけるついでに奉りける
あしたづの獨おくれてなく聲は雲のうへまできこえつがなむ
大江千里

藤原勝臣

人しれずおもふところは春霞たちいでて君がめにも見えなむ

歌めしける時に奉るとてよみておくに書きつけ

て奉りける

伊

勢

山川のおとにのみ聞く百敷をみをはやながら見るよしもがな

古今和歌集 卷第十九

雑體

長歌

題しらす

讀人しらす

逢ふことの	まれなるいろに	おもひそめ	我が身はつねに
あまぐもの	晴るるときなく	富士のねの	もえつつとはに
おもへども	逢ふことかたし	なにしかも	ひとをうらみむ
わたつみの	おきをふかめて	おもひてし	おもひはいまは
いたづらに	なりぬべらなり	ゆくみづの	絶ゆるときなく
かくなはに	おもひみだれて	降るゆきの	消なばけぬべく

おもへども 闇浮かの身なれば なほ止まず おもひはふかし
あしびきの やましたみづの 木がくれて たぎつころを
たれにかも あひかたらはむ 色にいでは ひと知りぬべみ
すみぞめの ゆふべになれば ひとり居て あはれあはれと
歎きあまり せむすべなみに 庭にいでて 立ちやすらへば
しろたへの ころものそでに 置くつゆの 消なばけぬべく
おもへども なほなけかれぬ はるがすみ よそにもひとに
あはむとおもへば

ふる歌奉りし時目錄のその長歌

貫

之

ちはやぶる かみの御代より くれたけの よよにもたえず
あまびこの おとはのやまの はるがすみ おもひみだれて
さみだれの そらもとどろに さ夜ふけて やまほととぎす

鳴くごとに たれも寐覺めて からのしき たつたのやまの
もみぢ葉を 見てのみしのぶ かみなづき しぐれしぐれて
ふゆの夜の にはもほだれに 降るゆきの なほ消えかへり
としごとに ときにつけつつ あはれてふ ことをいひつつ
きみをのみ 千代にといはふ 世のひとの おもひするがの
富士の嶺の 燃ゆるおもひにも あかずして わかるるなみだ
ふぢごろも おれるころも やちくさの ことの葉ごとに
すべらぎの おほせかしこみ まきまきの なかにつくすと
伊勢の海の うらのしほがひ 拾ひあつめ 取れりとすれど
たまの緒の みじかきころ 思ひあへず なほあらたまの
としを経て おほみやにのみ ひさかたの ひるよるわかす
つかふとて かへりみもせぬ わがやどの しのぶ草おふる

板まあらみ 降るはるさめの もりやしぬらむ

ふる歌にくはへて奉れる長歌

壬生忠岑

くれたけの よよのふるごと なかりせば 伊香保のぬまの
 いかにして おもふこころを のばへまし あはれむかしべ
 有りきてふ ひとまるこそは うれしけれ 身はしもながら
 ことの葉を あまつそらまで きこえあけ すゑの世までの
 あととなし いまもおほせの くだれるは ちりにつけとや
 ちりの身に つもれることを 問はるらむ これをおもへば
 いにしへも くすりけがせる けだものの くもに吼えけむ
 こちちして ちぢのなさけも おもほえず ひとつこころぞ
 ほこらしき かくはあれども 照るひかり ちかきまもりの
 身なりしを たれかはあきの くるかたに あざむきいでて

みかきより もリイ とのへもる身の みかきもり をさをさしくも
 おもほえず ここのかさねの なか¹にては あらしのかぜも
 きかざりき いまは野やまし ちかければ はるはかすみ
 たなびかれ なつはうつせみ 鳴きくらし あきはしぐれに
 そでをかし ふゆはしもにぞ せめらるる かかるわびしき
 身ながらに つもれるとしを しるせれば といつ¹のむつに
 なりにけり これに添はれる わたくしの としい¹のかずさへ
 やよければ 身はいやしくて としたかき ことくるしさ
 かくしつつ ながらのはしの ながらへて なにはのうらに
 たつなみの なみのしわにや おほほれむ さすがにいのち
 をしければ こしのくになる しらやまの かしらはしろく
 なりぬとも おとはのたきの おとに聞く 老いず死なすの

くすりもが きみが八千代を わかえつつ見む

君が世にあふさかやまの岩清水こがくれたりと思ひけるかな

冬のながうた

凡河内躬恒

ちはやぶる かみなづきとや けさよりは くもりもあへず
はつしぐれ もみぢとともに ふるさとの よし野のやまの
山あらしも さむく日ごとに なりゆけば たまの緒とけて
こきちらし あられみだれて しもこほり いやかたまれる
庭のおもに むらむら見ゆる ふゆくさの うへに降りしく
しらゆきの つもりつもりて あらたまの としをあまたも
すぐしつるかな

七條の后うせ給ひにける後によみける 伊勢
おきつなみ あれのみまさる 宮のうちは^にとしへて住みし

勢

伊勢の蚕も ふねながしたる ここちして よらむかたなく
かなしきに なみだのいろの くれなるは われらがなかの
しぐれにて あきのもみぢと ひとびとは おのがちりぢり
わかれなば たのむかけなく なりはてて とまるものとは
はなすすき きみなきにはに むれたちて そらをまねかば
はつかりの なきわたりつつ よそにこそ見め

旋頭歌

題しらす

讀人しらす

うち渡す をちかた人に ものまうすわれ
そのそこに しろくさけるは なにの花ぞも
かへし
春されば 野邊にまづさく 見れどあかぬ花

まひなしに ただなのるべき 花の名なれん
題しらす

はつせ川 ふる川のべに ふたもとある杉
としを経て またもあひみむ 二もとある杉

君がさす みかさの山の もみぢ葉のいろ

かみなづき しぐれのあめの 染めるなりけり

誹諧歌

題しらす

梅の花見にこそきつれうぐひすのひとくひとくと厭ひしもをる

讀人しらす
素性法師

やまぶきの花色衣ぬしやたれ問へどこたへすくちなしにして

いくばくの田をつくればか郭公しでのたをさを朝な朝なよぶ

藤原敏行朝臣

七月六日たなばたの心をよめる

藤原かねすけ

いつしかとまたく心をはぎにあけて天の河原をけふや渡らむ

題しらす

凡河内躬恒

陸言（ウツミ）もまだ盡きなくに明けぬ（にけい）めりいづらは秋の長してふ夜は

僧正遍昭

秋の野になまめきたてる女郎花あなかしがまし花もひととき

讀人しらす

秋くれば野邊にたはるる女郎花いづれの人かつまで見るべき

秋霧のはれてくもればをみなへしはなの姿ぞ見えかくれする

花と見て折らむとすれば女郎花うたたある様の名にこそありけれ

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

在原むねやな

秋かぜにほころびぬらし藤袴つづりさせてふきりぎりす鳴く

あす春立たむとしける日隣の家の方より風の雪

を吹きこしけるを見て其隣へ詠みて遣しける 清原深養父

冬ながら春のとなりのちかければなか垣よりぞ花はちりける

題しらす 讀人しらす

石の上ふりにし戀の神さびてたたるにわれはいぞねかねつる

枕よりあとより戀のせめくればせむかたなみぞ床なかにをる

戀しきが形もかたこそありときけたてれをれどもなき心地する

ありぬやと心見がてら逢ひ見ねばたはぶれにくき迄ぞ戀しき

みみなしの山の口なしえてしがなおもひの色の下ぞめにせむ

足引の山田のそほづ己さへわれをほしといふうれはしきこと

紀のめのと

富士のねのならぬおもひにもえばもえ神だにけたぬ空し煙を

紀のありとも

逢ひ見まくほしは數なく有りながら人につきなみ惑ひこそすれ

小野小町

人に逢はむつきのなきには思ひおきて胸はしり火に心やけけり

藤原興風

春霞たなびく野邊のわかなにもなりみてしがな人もつむやと

讀人しらす

思へどもなほうとまれぬ春霞かからぬ山のあらじとおもへば

平貞文

春の野のしけき草葉のつま戀にとびたつ雉のほろろとぞなく

秋の野につまなき鹿の年をへてなぞ我が戀のかひよとぞ鳴く
紀のよしひと

躬 恒

蟬の羽のひとへに薄き夏衣なればよりなむものにやはあらぬ

忠 岑

隱沼かたがはの下より生ふるねぬなはの寐ぬ名はたてじくるな厭たひそ

讀人しらす

ことならば思はずとやはいひ果てぬなぞ世のなかの玉襷なる

思ふてふ人の心のくまごとに立ちかくれつつ見るよしもがな

思へども思はずとのみいふなればいなや思はじ思ふかひなし

われをのみ思ふといはばあるべきをいでや心はおほ幣ひらにして

われを思ふ人を思はぬむくいにやわが思ふ人のわれを思はぬ

一本

深 養 父

思ひけむひとをぞともに思はましまさしや報なかりけりやは

一本

讀人しらす

出でて行かむ人をとどめむよしなきに隣の方に鼻もひぬかな

くれなるにそめし心もたのまれず人をあくには移るてふなり

厭はるる我が身は春の駒なれや野がひがてらに放ち捨てつる

鶯のこぞのやどりのふるすとやわれには人のつれなかるらむ

さかしらに夏は人まね笹の葉のさやぐ霜夜をわがひとりぬる

平 中 興

逢ふ事の今ははつかに成りぬれば夜深からではつきなかりけり

左のおほいまうち君

もろこしの吉野の山に籠るとも後れむと思ふわれならなくに

くもはれぬあさまの山のあさましや人の心を見てこそやまめ
な
か
き

伊 勢

難波なるながらの橋もつくるなり今は我が身を何にたとへむ

讀人しらす

まめなれど何ぞはよけく刈萱かきかの亂れてあれどあしけくもなし

興 風

何かその名のたつ事のをしからむ知りて惑ふはわれ一人かは

いとこなりける男によそへて人のいひければ
く
そ

外まながら我が身にいとまのよるといへばただ偽にすくばかりなり

題しらす
讀 岐

ねぎごとをさのみ聞きけむ社こそ果はなけきの森となるらめ

なけきこる山とし高くなりぬればつら杖のみぞまづつかれける
大 輔

讀人しらす

なけきをばこりのみつみて足引の山のかひなくなりぬべらなり

人戀ふることを重荷と荷ひもてあふごなきこそ佗しかりけれ

宵の間に出でて入りぬる三日月のわれて物思ふ頃にもあるかな

そへにととすればかかりかくすればあないひ知らずあふさきるさに

世の中の憂きたびごとに身をなけば深き谷こそ淺くなりなめ

在 原 元 方

世の中はいかにくるしと思ふらむこころの人に恨みらるれば

讀人しらす

何をして身のいたづらに老いぬらむ年の思はむ事ぞやさしき

身は捨てつ心をだにも放^ほらさじ終にはいかなると知るべく

興

風

千

里

白雪のともに我が身はふりぬれど心は消えぬ物にぞありける

題しらす

讀人

しらす

梅の花咲きての後のみなればやすきものとのみ人のいふらむ

法皇西川におはしましたりける日猿山のかひに

さけぶといふことを題にてよませ給うける

躬

恒

侘びしらに猿^{さし}な鳴きそ足引の山のかひある今日にやはあらぬ

題しらす

讀人

しらす

世を厭ひこのもとごとくに立ちよりてうつぶし染の麻の衣^{きぬ}なり

古今和歌集 卷二十

大歌所御歌

おほなほびの歌

あたらしき年の始にかくしこそ千年をかねてたのしきをへめ

日本紀にはつかへまつらめよるづ代までに

ふるきやまと舞のうた

しもとゆふかつらき山に降る雪のまなく時なく思ほゆるかな

近江ぶり

近江より朝立ちくればうねの野に鶴^{つる}ぞ鳴くなる明けぬ此夜は

みづぐきぶり

水ぐきの岡のやかたに妹とあれとねての朝けの霜のふりはも
しはつ山ぶり

しはつ山うち出でて見れば笠ゆひの島こぎかくる棚なし小舟

神あそびの歌

とりものの歌

神垣のみむろの山の榊葉はかみのみまへにしけりあひにけり
霜やたびおけどかれせぬ榊葉のたちさかゆべき神のきねかも
まきもくのあなしの山の山人と人も見るがにやまかづらせよ
みやまには霰ふるらし外山やまなるまさきのかづら色づきにけり
陸奥むつのあだちのま弓わがひかば末さへよりこしのびしのびに
我が門の板井の清水里とほみ人し汲まねばみくさおひにけり

ひるめのうた

ささのくまひのくま川に駒とめてしばし水かへ影をだに見む

かへしもの歌

あをやぎをかたいによりて鶯のぬふてふ笠は梅のはながさ
まがねふくきびの中山おびにせるほそ谷川のおとのさやけさ

此歌は承和のおほんべのきびの國の歌

美作やくめのさらやまさらさらにわが名はたてじ萬代までに

これは水の尾のおほんべの美作の國の歌

みののくに關の藤川たえずして君につかへむよろづ代までに

これは元慶のおほんべの美濃の歌

君が代はかぎりもあらし長濱のまさごの數はよみつくすとも

これは仁和のおほんべの伊勢の國の歌

大伴黒主

近江のや鏡の山をたてたればかねてぞ見ゆるきみが千とせは
これは今上のおほんべの近江の歌

東歌

みちのくうた^{わたい}
あぶくまに霧たちくもり明けぬとも君をばやらじまてばすべなし
みちのくはいづくはあれど鹽竈のうらこぐ舟の綱手かなしも
わがせこを都にやりて鹽竈のまがきのしまのまつぞこひしき
をぐろ崎みつの小島の人ならば都のつとにいざといはましを
みさぶらひみかさと申せ宮城野の木の下露はあめにまされり
最上川のほればくだるいな舟のいなにはあらずこの月ばかり

君をおきてあだし心をわがもたばすゑの松山なみもこえなむ

さがみ歌

こよろぎの磯立ちならし磯菜つむめざしぬらすな沖にをれ波

ひたち歌

筑波根の此面^{こゝ}彼面^{あつら}にかけはあれど君がみ影にますかけはなし

筑波根の嶺のもみぢ葉落ち積りしるもしらぬもなべて悲しも

甲斐うた

かひがねをさやにも見しがけけれなく横をりふせるさやの中山

甲斐が根をねこし山こし吹く風を人にもがもや言づてやらむ

伊勢うた

をふの浦にかたえさし覆ひなる梨のなりもならずもねて語らはむ

冬の賀茂の祭の歌

藤原敏行朝臣

ちはやぶる賀茂のやしらの姫小松萬代ふとも色はかはらじ

* * * * *

家々稱證本之本乍書入以墨滅歌今別書之

卷第十 物名部

ひぐらし

貫

之

杣人は宮木ひくらしあしびきの山のやまびこよびとよむなり
在郭公下空蟬上

勝

臣

かけりても何をかたまのきてもみむからは焔となりにし物を

をかたまの木 友則下

くれのおも

貫

之

こし時と戀つつをれば夕ぐれのおもかけにのみ見え渡るかな

忍草 利貞下

おきの井 みやこじま

小野 小町

おきのゐて身をやくよりも悲しきはみやこしまべの別なりけり

からこと 清行下

そめどの あはた

あやもち

うきめをばよそめとのみぞのがれ行く雲のあはたつ山の麓に

此歌は水のをの帝の染殿より栗田へうつり給うける時によ
める 桂宮下

卷第十一

奥山の菅の根しのぎふる雪下

けふひとをこふる心はおほるがは流るる水におとらざりけり
わぎもこにあふ坂山の篠すすきほには出ですも戀ひ渡るかな

卷第十三

戀しくばしたにを思へ紫の下

犬がみのとこの山なるいさなとりや川いさと答へよわが名もらすな

この歌ある人あめの帝の近江の采女うねめにたまへると

かへし

うねめの奉れる

やましなの音羽の瀧の音にだに人のしるべくわがこひめやも

卷第十四

おもふてふことの葉のみや秋をへて下

衣通姫せきほりひめのひとりりて帝をこひ奉りて

わがせこがくべき宵なりささがにの蛛の振舞かねてしるしも

深養父

戀しとはたがなづけけむことならむ下 貫

之

道しらばつみにもゆかむ住の江のきしにおふてふ戀わすれ草

古今和歌集終

後撰和歌集 卷第一

春歌上

元日に二條の後の宮にて白き大うちぎをたまは
りて

藤原敏行朝臣

降る雪のみのしろ衣うちきつつ春きにけりとおどろかれぬる

凡河内躬恒

春たつ日よめる

春立つとききつるからに春日山きえあへぬ雪の花と見ゆらむ

兼盛王

今日よりは萩のやけ原かきわけて若菜つみにまむと誰をさそはむ
ある人の許ににひまるりの女の侍りけるが月日

久しく経て陸月のついたち頃にまへゆるされた
りけるに雨のふるを見て

讀人しらす

白雲のうへしる今日ぞ春雨のふるにかひある身とは知りぬる

朱雀院の子日あひにおはしましけるにさはる事侍り

てえつかうまつらずして延光朝臣につかはしけ

る

左大臣

松もひき若菜もつまずなりぬるをいつしか櫻はやもさかなむ

院御かへし

まつにくる人しなれば春の野の若菜もなにかひなかりけり

子の日にをとこのもとより今日は小松引きにな

むまかり出づるといへりければ

讀人しらす

君のみや野邊に小松を引きにゆく我もかたみにつまむ若菜を

題しらす

霞かすたつ春日の野邊のわかなにもなりみてしがな人もつむやと

子日しにまかりけるに人におくれてつかはしけ

る

躬恒

春の野に心をだにもやらぬ身は若菜はつまでとしをこそつめ

宇多院に子日せむとありければ式部卿のみこそ

さそふとて

行明親王

故郷の野邊みにゆくといふないめるをいざ諸ともに若菜つみてむ

はつ春の歌とて

紀友則

水のおもにあや吹きみだる春風やいけの氷をけふはとくらむ

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

讀人しらす

ふく風や春たちきぬとつけつらむ枝にこもれる花さきにけり

しはすばかりに大和へ事につきてまかりける程
に宿りて侍りける人の家のむすめを思ひかけて
侍りけれどもやむごとなき事によりてまかりの

躬

恒

ほりにけりあくる春親のもとに遣しける

春日野におふるわかかなを見てしより心をつねに思ひやるかな
かれにけるをとこのもとにその住みけるかたの

兼 覽 王 母

庭の木の枯れたりける枝を折りて遣しける
もえ出づる木のめを見てもねをぞなく枯れにし枝の春を知らねば

女の宮仕にまかり出でて侍りけるに珍しき程は

これかれ物いひなどし侍りけるを程もなく一人

にあひ侍りにければ睦月のついたちばかりにい

ひ遣し侍りける

讀 人 し ら ず

いつのまに霞たつらむ春日野のゆきだにとけぬ冬とみしまに

題しらす

閑院左大臣

なほざりに折りつるものを梅の花こき香にわれや衣そめてむ

前栽せんざいに紅梅を植ゑて又の春遅くさきければ

藤原兼輔朝臣

宿近くうつして植ゑしかひもなくまち遠にのみにほふ花かな

延喜の御時歌めしけるに奉りける

紀 貫 之

はるがすみたなびきにけり久方の月のかつらも花やさくらむ

おなじ御時みづし所にさぶらひけるころしづめ

るよしを歎きて御覽せさせよと覺しくてある藏

人におくりて侍りける十二首がうち

躬

恒

いづことも春の光はわかなくにまだみよしの山はゆきふる

人のもとに遣しける

伊

勢

白玉をつつむ袖のみながるるは春はなみだもさえぬなりけり
人にわすられて侍りけるころ雨のやまず降りけ

れば

讀人しらす

春たちてわが身ふりぬるながめには人の心のはなもちりけり
わがせこに見せむと思ひし梅の花それとも見えす雪のふれば

題しらす

きて見べき人もあらじなわがやどの梅の初花をりつくしてむ
ことならば折り盡してむ梅の花わがまつ人のきても見なくに
吹く風にちらすもあらなむ梅の花わがかり衣ひと夜やどさむ
我がやどのうめの初花ひるは雪よるは月かと思ひ見えまがふかな
梅の花外ながら見む吾妹子がとがむばかりの香にもこそしめ

素性法師

梅の花をればこほれぬ我が袖にほひかうつせ家づとにせむ

をとこにつきて外にうつりて

讀人しらす

心もてをるかはやな梅の花香をとめてだにとふひとのなき

年を経て心かけたる女の今年ばかりをだに待ち

くらせといひけるが又の年もつれなかりければ

人心うさこそまされ春たてばとまらず消ゆるゆきかくれなむ

題しらす

梅の花香をふきかくる春風にこころをそめばひとやとがめむ
はるさめのふらば野山にまじりなむ梅の花笠ありといふなり
かきくらし雪はふりつつしかすがに我が家のそのに鶯ぞなく
谷さむいまだすだたぬ鶯のなくこゑわかみひとのすさめぬ
鶯のなきつるこゑにさそはれて花のもとにぞわれは來にける

花だにもまださかなくに鶯のなくひとこゑをはるとおもはむ
君がため山田の澤にゑぐつむとぬれにし袖はいまもかわかず

あひしりて侍りける人の家にまかれりけるに梅

の木侍りけりこの花さきなむ時は必ずせうそこ

せむといひけるを音なく侍りければ

朱雀院の兵部卿のみこ

うめの花いまは盛になりぬらむたのめし人のおとづれもせぬ

かへし

紀長谷雄朝臣

春風雨にいかにぞ梅やにほふらむわが見る枝はいろもかはらず

春の日ことのついでありてよめる

讀人しらす

うめの花ちるてふなべにはるさめのふりでつつなく鶯のこゑ

かよひすみ侍りける人の家の前なる柳を思ひや

りて

躬恒

いもがいへのはひりにたてる青柳にいまやなくらむ鶯のこゑ

松の下にこれかれ侍りて花を見やりて

坂上是則

深みどりときはの松の陰にゐてうつろふ花をよそにこそ見れ

藤原雅正

花の色はちらぬまばかりふるさにつねには松の縁なりけり

紅梅の花を見て

躬恒

紅にいろをばかへて梅のはな香ぞことごとくにほはざりける

これかれまるとして酒たうべけるまへに梅の花

に雪のふりかかりけるを

貫之

ふる雪はかつもけななむ梅の花ちるに惑はず折りてかざさむ

兼輔朝臣のねやの前に紅梅を植ゑて侍りけるを

三とせばかりの後花さきなどしけるを女どもそ

の枝を折りてみすのうちよりこれはいかがとい
 だしてければ
 春毎に咲きまさるべき花なれば今年をもまだあかずとぞ見る
 はじめて宰相になりて侍りける年になむ

後撰和歌集 卷第二

春歌中

年老いて後梅の花植^木ゑてあくる年の春おもふと
 ころありて

藤原扶幹朝臣

植ゑし時花見むとしも思はぬに咲きちるみれば齡老いにけり

ねやの前に竹のある所に宿り侍りて
 藤原伊衡朝臣

竹ちかくよどこねはせじ鶯の鳴くこゑきけばあさいせられず

大和のふるの山をまかるとて
 僧 正 遍 昭

いそのかみふるのやまべの櫻花うゑけむときをしる人ぞなき

花山にて道俗酒たうべけるをりに
 素 性 法 師

やまもりはいはばいはなむ高砂のをへの櫻をりてかざさむ

面白き櫻を折りて友だちのつかはしたりければ 讀人しらす
櫻花いろはひとしき枝なれどかたみに見ればなぐさまなくに

かへし 伊 勢

見ぬ人の形見がてらは折らざりき身になまぢへい准ふる花にしあらねば

櫻の花をよめる 讀人しらす

吹く風をならしの山の櫻花のどけくぞみる散らじとおもへば

前栽に竹の中に櫻のさきたるを見て 坂 上 是 則

櫻花けふよく見てむくれたけの一よのほどにちりもこそすれ

題しらす 讀人しらす

櫻花にほふともなく春くればなどかなけきのしけりのみする

貞觀の御時弓のわざつかうまつりけるに 河原左大臣

けふ櫻半にわが身いざぬれむ香ごめにさそふかぜのこぬまに

家より遠き所にまかる時前栽の櫻の花にゆひつ 菅原右大臣

け侍りける

櫻花ぬしをわすれぬものならば吹きこん風にことづてはせよ

春のころを 伊 勢

あをやぎのいとよりはへて織るはたをいづれの山の鶯かきる

花のちるを見て 凡河内躬恒

あひ思はで移ろふ色をみる物を花にしられぬながめするかな

歸る雁をききて 讀人しらす

かへるかり雲路にまどふ聲すなり霞ふきとけこのめはるかぜ

朱雀院の櫻の面白きことと延光朝臣のかたり侍

りければ見るよしやういもあらまし物をなど昔を思ひ

出でて

大將御息所

咲きさかずわれになつけそ櫻花人づてにやはきかむと思ひし

題しらす

讀人しらす

春くれば木がくれ多きゆづく夜おほつかなくも花陰はなかげにして
たちわたる霞のみかはやまたかみ見ゆる櫻のいろもひとつを
大空におほふばかりの袖もがなはるさく花をかぜにまかせじ
やよひのついたちごろに女に遣しける

なけきさへ春をしるこそ佗しけれもゆとは人に見えぬ物から

春雨のふらばおもひのきえもせでいとどなけき

のめをもやすらむといふ古歌の心ばへを女にい

ひ遣したりければ

もえ渡るなけきは春のさがなれば大方にこそあはれとも見れ

女のもとにつかはしける

藤原師尹朝臣

青柳のいとつれなくもなりゆくかいかなる筋に思ひよらまし

衛門の御息所の家うづまさうづまさに侍りけるにそこの

花面白かなりとて折りにつかはしたりければき

こえたりけるこえたりける

やまざとに散りなましかば櫻花匂ふさかりも知られざらまし

御かへし

にほひこき花の香もてぞしられける植ゑてみるらむ人の心は

小貳につかはしける

藤原朝忠朝臣

ときしもあれ花の盛につらければ思はぬ山に入りやしなまし

かへし

わがためにおもはぬ山のおとにのみ花さかりゆく春を恨みむ人い

題しらす

宮道 高風

春の池の玉藻にあそぶにほどりの足のいとなき戀もするかな

寛平の御時花の色霞にこめて見せずといふ心を

よみて奉れとおほせられければ

藤原 興風

やまかぜの花の香かどふふもとはは春の霞ぞほだしなりける

題しらす

讀人 しらす

春雨のよにふりにたる心にもなほあたらしく花をこそおもへ

京極の御息所におくり侍りける

春霞たちてくもるになりゆくは雁のこころのかはるなるべし

題しらす

寐られぬをしひてわがぬる春の夜の夢を現になすよしもがな

忍びたりける男の許に春行幸あるべしと聞きて

装束一くだりてうじて遣すとして櫻色の下襲したがりに添

へて侍りける

我がやどの櫻の色はうすくとも花のさかりはきてもをらなむ

忘れ侍りにける人の家に花をこふとて 兼 覽 王

年をへて花の便たよりにこととはばいとどあだなる名をや立てなむ

呼子鳥を聞き隣の家におくり侍りける 春 道 列 樹

わが宿のはなにな鳴きそ呼子鳥よぶかひありて君もこなくに

壬生忠岑が左近のつがひのをさにて文おこせて

侍りけるついでに身を恨みて侍りける返事に 紀 貫 之

ふりぬとて痛くな佗びそ春雨のただにやむべき物ならなくに

後撰和歌集 卷第三

春歌下

贈太政大臣あひわかれて後ある所にてその聲を
聞きてつかはしける

藤原顯忠朝臣母

鶯の鳴くなるころは昔にてわが身ひとつのあらずもあるかな

櫻の花の瓶にさせりけるが散りけるを見て中務

に遣しける

貫

之

久しかれあだにちるなと櫻花かめにさせれどうつろひにけり

かへし

千代ふべき瓶にさせれど櫻花とまらぬことは常にやはあらぬ

題しらす

讀人しらす

散りぬべき花の限はおしなべていづれともなくをしき春かな

朝忠朝臣の家の隣に侍りけるに櫻のいたう散り

ければいひ遣しける

伊

勢

垣越かきこにちりくる花を見るよりは根ごめに風の吹きもこさなむ

女につかはしける

讀人しらす

春の日のながきおもひはわすれじを人の心にあきや立つらむ

題しらす

よそにても花見る毎に音をぞなくわが身に疎き春のつらさに

貫

之

風をだにまちてぞ花の散りなまし心づからにうつろふがうき

荒れたる所に住み侍りける女つれづれにおもほ

え侍りければ庭にある董の花をつみていひつか
はしける

讀人しらす

我が宿にすみれの花の多けいかればきやどる人やあると待つかな
題しらす

やまたかみ霞をわけてちる花をゆきとやよその人はみるらむ
吹く風のさそふ物とはしりながら散りぬる花のしひて戀しき

清原深養父

うちはへて春はさばかりのどけきを花の心やなにいそぐらむ
常にせうそこ遣しける女ともだちの許より櫻の

花のいと面白かりける枝を折りてこれそこの花
に見くらべよとありければ

こわかぎみ

わが宿のなけきは春もしらなくに何にか花をくらべてもみむ

父のみこのこころさせるやうにもあらで常に物思ひける人
にてなむありける

讀人しらす

春の日のかけそふ池のかがみには柳のまゆぞまづはみえける

春の暮にかれこれ花惜みける所にて

かくながら散らで世をやは盡してぬ花の常こま盤はもありとみるべく

延喜の御時殿上のをのこどもの中にめしあけら

凡河内躬恒

わておのおのかざしさしけるついでに
かざせども老も隠れぬこの春ぞ花のおもてはふもせつべらなる

讀人しらす

一とせに重かさなる春のあらばこそふたたび花をみむとたのまめ
花のもとにてかれこれ程もなく散ることなどたい申

しけるついでに

貫

之

春くれば咲くてふ事を濡衣ぬれぎぬにきするばかりの花にぞありける

春花見に出でたりけるを見つけて文を遣したり

ける其返事もなかりければあくるあした昨日の

返しとこひにまうできたりければいひ遣したり

ける

読人しらす

春霞立ちながら見し花ゆるゑにふみとめてけるあとのくやしき

男のもとよりたのめおこせて侍りければ

春日さす藤のうらばのうらとけて若しおもはば我もたのまむ

題しらす

伊

勢

鶯に身をあひかへば散るまでもわがものにして花は見てまし

元良のみこ兼茂朝臣のむすめにすみ侍りけるを

法皇のめしてかの院にさぶらひければえあふ事も侍らざりければあくる年の春櫻の枝にさして

彼のざうしにさしおかせける

元良のみこ

花のいろは昔ながらに見しひとの心のみこそうつろひにけれ

月の面白かりける夜花を見て

源さねあきら

あたら夜の月とはなとおなじくば心哀しれらむ人に見せばや

あがたの井戸といふ家より藤原治方につかはし

ける

橘 公平女

みやこびと来てもをらなむ蛙なくあがたのるどの山吹のはな

助信が母のみまかりて後も時々かの家に敦忠朝

臣のまかり通ひけるに櫻の花のちりけるをりに

まかりて木のもとに侍りければ家の人のいひい

だしける

讀人しらす

いまよりは風にまかせむ櫻花ちる木のもとにきみとまりけり

かへし

敦忠朝臣

風にしもなにかまかせむ櫻花にほひあかぬに散るはうかりき

櫻川といふ所ありとききて

貫之

つねよりも春べになれば櫻川なみのはなこそまなくよすらめ

前栽に山吹あるところにて

兼輔朝臣

わがきたるひとへ衣は山吹の八重のいろにもおとらざりけり

題しらす

在原元方

一年にふたたびさかぬ花なればむべ散ることを人はいひけり

寛平の御時櫻の花の宴ありけるに雨のふり侍り

ければ

藤原敏行

春雨の花の枝よりながれこばなほこそぬれめ香もやうつると

和泉の國にまかりけるに海のつらにて

讀人しらす

春ふかき色にもあるかな住の江のそこもみどりに見ゆる濱松

女ども花見むとて野邊に出でて

典侍因香朝臣

春くれば花見むと思ふこころこそ野邊の霞とともにたちけれ

あひしれりける人の久しうとはざりければ花盛

にいひつかはしける

讀人しらす

我をこそとふにうからめ春霞はなにつけても立ちよらぬかな

かへし

源清蔭朝臣

たちよらぬ春のかすみをたのまれよ花の邊みたりと見ればなるらむ

山櫻を折りておくり侍るとて

伊勢

君みよとたづねて折れる山櫻ふりにしいろとおもはざらなむ

宮づかへし侍りける女のいそのかみといふ所に
住みて京の友だちのもとに遣しける

讀人しらす

神さびてふりにし里に住む人はみやこにほふ花だにも見す

法師にならむの心ありける人大和にまかりて程

久しく侍りてのちあひしりて侍りける人のもと

より月ごろはいかにぞ花は咲きたりやといひて

侍りければ

みよしのの吉野の山のさくらばな白雲とのみ見えまがひつつ

亭子院の歌合の歌

山ざくら咲きぬるときは常よりも峯のしら雲たちまさりけり

山櫻を見て

貫

之

しらくもと見えつるものを櫻花けふは散るとや色ことになる

題しらす

讀人しらす

我が宿のかけともたのむ藤の花たちよりくとも波に折らるな

花ざかりまだも過ぎぬに吉野川かけにうつろふ岸のやまぶき

人の心たのみがたくなりければ山吹のちりさ

したるをこれ見よとてつかはしける

しのびかねなきて蛙のをしむをも知らずうつろふ山吹のはな

やよひばかりの花の盛に道まかりけるに

僧 正 遍 昭

折りつればだぶさにけがるたてながら三世の佛にはな奉つる

題しらす

讀人しらす

みなぞこの色さへふかき松が枝に千年をかねてさけるふぢ波

三月の下の十日ばかりに三條右大臣兼輔朝臣の

家にまかり渡りて侍りけるに藤の花さける遣水

の邊にてかれこれ大みきたうべけるついでに 三條右大臣
限なき名におふふぢの花なればそこひもしらぬ色のふかさかよ

兼輔朝臣

色ふかくにほひしことは藤波のたちもかへらで君とまれとか

貫之

棹させど深さもしらぬふちなれば色をば人もしらじとぞ思ふ

ことふえなどしてあそび物語などし侍りける程

に夜更けにければまかりとまりて又のあしたに 三條右大臣

きのふ見し花の顔とてけさ見ればねてこそ更に色まさりけれ

兼輔朝臣

一夜のみねてしかへらば藤の花こころとけたる色みせむやは

貫之

あさほらけしたゆく水は浅けれどふかくぞ花の色はみえける

題しらす

讀人しらす

うぐひすのいによるてふ玉柳ふきなみだりそ春のやまかせ

躬恒

いつのまに散りはてぬらむ櫻花おもかけにのみ色をみせつつ

敦實のみこの花見侍りける所にて

源仲宣朝臣

散る事のうきも忘れてあはれてふことを櫻にやどしつるかな

櫻のちるを見て

讀人しらす

櫻いろにきたる衣のふかければ過ぐる月日もをしけくもなし

やよひにうるふ月ある年つかさめしのころ申文

に添へて左大臣家につかはしける

貫之

あまりさへ有りて行くべき年だにも春に必ずあふ山もがな

かへし

左大臣

常よりものどけかるべき春なれば光にひとの逢はざらめやは

常にまうでき通ひける所にさはる事侍りて久し

くまできあはずして年かへりにけりあくる春彌

生のつごもりに遣しける

藤原雅正

君こそて年は暮れにき立ちかへり春さへ今日になりける哉

共にこそ花をもみめとまつ人のこぬものゆるに惜しき春かな

かへし

貫之

君にだにとはれでふれば藤の花たそがれ時もしらずぞありける

やへむぐら心のうちに深ければ花見にゆかむいでたちもせず

題しらす

讀人しらす

をしめども春のかぎりのけふの又夕暮にさへなりにけるかな

かへし

左大臣

常よりものどけかるべき春なれば光にひとの逢はざらめやは

常にまうでき通ひける所にさはる事侍りて久し

くまできあはずして年かへりにけりあくる春彌

生のつごもりに遣しける

藤原雅正

君こそて年は暮れにき立ちかへり春さへ今日になりける哉

共にこそ花をもみめとまつ人のこぬものゆるに惜しき春かな

かへし

貫之

君にだにとはれでふれば藤の花たそがれ時もしらずぞありける

やへむぐら心のうちに深ければ花見にゆかむいでたちもせず

題しらす

讀人しらす

をしめども春のかぎりのけふの又夕暮にさへなりにけるかな

躬恒

行先ををしみし春のあすよりは來にし方にもなりぬべきかな

やよひのつごもり

貫之

ゆく先になりもやすると頼みしを春の限はけふにぞありける

讀人しらす

花しあらば何かは春の惜しからむ暮るともけふは歎かざらまし

躬恒

暮れて又あすとだになき春の日を花の陰にて今日はくらさむ

三月のつごもりの日久しうまうでこぬよしいひ

てはべる文の奥にかきつけ侍りける

貫之

又もこむ時ぞと思へど頼まれぬ我が身にしあれば惜しき花かな

貫之かくて同じ年になむ身まかりにける

後撰和歌集 卷第四

夏歌

題しらす

讀人しらす

今日よりは夏の衣になりぬれど著る人さへはかはらざりけり
うのはなの咲ける垣根のつききよみいねず聞けとや鳴く郭公

卯月ばかり友達のすみ侍りける所近く侍りて必
ず消息遣してむと侍りけるに音なく侍りければ

郭公きゐる垣根はちかながらまちどほにのみこゑのきこえぬ
かへし

郭公こゑまつほどは遠からでしのびに鳴くを聞かぬなるらむ

物いひかはし侍りける人のつれなく侍りければ

其家の垣根の卯花を折りていひ入れて侍りける

恨めしき君が垣根のうの花はうしと見つつもなほたのむかな

かへし

憂き物と思ひしりなばうの花のさける垣根もたづねざらまし

卯花の垣根ある家にて

時わかすふれる雪かとみるまでに垣根もたわにさけるうの花

友達のとぶらひまでこぬ事を恨みつかはすとて

白妙ににほふかきねのうの花のうくも來てとふ人のなきかな

時わかす月か雪かと見るまでにかきねのままに咲けるうの花

なきわびぬいづちかゆかむ郭公なほうの花のかけははなれじ

卯月ばかりの月面白かりける夜人に遣しける

あひ見しもまだ見ぬこひも郭公月に鳴く夜ぞよに似ざりける

女のもとに遣しける

ありとのみ音羽の山の郭公ききにきこえてあはずもあるかな

題しらす

伊

勢

木こがくれてさ月まつとも郭公はねならはしにえだうつりせよ

藤原のかつみの命婦みやうぶにすみ侍りける男人の手に

うつり侍りにける又の年杜若かきつばたにつけてかつみに

遣しける

良岑義方朝臣

いひそめし昔の宿のかきつばた色ばかりこそかたみなりけれ

賀茂の祭の物見侍りける女の車にいひいれて侍

りける

讀人しらす

行きかへるやそ氏人の玉かづらかけてぞ頼むあふひてふ名を

かへし

木綿かたすき褌ふんどしかけてもいふなあだびとのあふひてふ名は褌みそぎにぞせし

題しらす

このごろはさみだれ近み郭公おもひみだれてなかぬ日ぞなき

待つ人はたれならなくに郭公おもひのほかに鳴かばうからむ

にほひつつ散りにし花ぞおもほゆる夏は緑の葉のみしければ

朱雀院の春宮みさぎにおはしましける時帶刀等たちばき五月ば

かり御書所にまかりて酒などたうべてこれかれ

歌よみけるに

大春日師範

さみだれに春のみやびとくるときは郭公をやうぐひすにせむ

夏の夜深養父が琴ひくを聞きて

藤原兼輔朝臣

みじか夜の更けゆくままに高砂のみねの松風ふくかとぞきく

同じ心を

貫之

あしびきの山下水は行き通ひことのねにさへながるべらなり

題しらす

藤原高經朝臣

夏の夜はあふ名のみして敷たへの塵拂ふまに明けぞしにける

壬生忠岑

夢よりもはかなきものはなつの夜の曉がたのわかれなりけり

あひしりて侍りける中のかれもこれも志はあり

ながら包む事ありてえあはざりければ

讀人しらす

外ながら思ひしよりも夏の夜の見はてぬ夢ぞはかなかりける

夏の夜しばし物語して歸りにける人の許に又の

あしたつかはしける

伊勢

ふた聲ときくとはなしに郭公夜ふかくめをもさましつるかな

人のもとに遣しける

藤原安國

逢ふと見し夢に習ひて夏の日の暮れがたきをも歎きつるかな

讀人しらす

うとまるる心しなくばほととぎす飽かぬ別にけさは鳴かまし

思ふ事侍りける頃郭公を聞きて

をりはへて音をのみぞなく郭公しけきなけきの枝ごとになるて

四五月ばかり遠き國へまかり下らむとするころ

郭公を聞きて

ほととぎす聞けば来てはたびとや鳴きわたるわれは別のをしき都を

題しらす

ひとり居てものおもふわれを郭公ここにしも鳴く心あるらし
玉くしけ明けつるほどの郭公ただふたこゑも鳴きてこしかな

五月ばかりに物いふ女に遣しける
數ならぬわがみ山邊のほととぎす木の葉がくれの聲は聞ゆや

題しらす

とこ夏になきても經なむ郭公しけきみやまになにかへるらむ
ふすからにまづぞ佗しき郭公なきもはてぬに明くる夜なれば

三條右大臣少將に侍りける時しのびに通ふ所侍

りけるをうへのをのこども五六人ばかり五月の

長雨少しやみて月朧たぼろなりけるに酒たうべむとて

おし入りて侍りけるを少將はかれがたにて侍ら

ざりければ立ちやすらひてあるじいだせなご戯

ぶれ侍りければ

あるじの女

五月雨にながめくらせる月なればさやかに見えず雲隠れつつ

女子もて侍りける人に思ふ心侍りて遣しける 讀人しらす

ふた葉よりわがしめゆひし撫子の花のさかりを人にをらすな

題しらす

足引の山ほととぎすうちはへて誰かまさると音をのみぞ鳴く

五月なが雨の頃久しくたえ侍りにける女のもと

にまかりたりければ

女

つれづれとながむる空の郭公とふにつけてぞ音はなかれける

題しらす

いろかへぬ花たちばなに郭公ちよをならせるこゑきこゆなり
旅寐してつま戀すらしほととぎす神なび山にさ夜更けてなく
夏の夜に戀しき人の香をとめば花たちばなぞしるべなりける

女の物見にまかり出でたりけるにこと車傍に來

りけるに物などいひかはして後に遣しける 伊 勢

郭公はつかなる音を聞き初めてあらぬもそれとおほめかれつつ

五月ふたつ侍りけるに^年おもふこと侍りて 讀人しらす

五月雨のつづける年のながめには物思ひあへる我ぞわびしき

女にいと忍びて物いひてかへりて

ほととぎす一こゑにあくる夏の夜の暁がたやあふごなるらむ

題しらす

うちはへて音をなきくらす空蟬のむなしき戀も我はするかな

つねもなき夏の草葉におくつゆを命とたのむせみのはかなさ

八重むぐらしけき宿には夏むしの聲よりほかにとふ人もなし

空蟬の聲きくからにもものぞ思ふわれも空しき世にしすまへば

人のもとにつかはしける 藤原師忠朝臣

いかにせむ小倉のやまの郭公おほつかなしと音をのみぞなく

題しらす 讀人しらす

ほととぎす暁がたの一こゑはうきよのなかをすぐすなりけり

人しれずわがしめし野の撫子は花さきぬべきときぞきにける

わがやどの垣根に植ゑし撫子は花にさかなむよそへつつみむ

常夏の花をだに見ばことなしにすぐす月日もみじかかりなむ

とこなつに思ひそめては人しれぬ心のほどはいろに見えなむ

かへし

色といへば濃きもうすきも頼まれず大和撫子ちる世なしやは

師尹朝臣のまだわらはにて侍りける時常夏の花

を折りて持ちて侍りければこの花につけて内侍

のかみの方におくり侍りける 太政大臣

撫子はいづれともなくにほへどもおくれて咲くは哀なりけり

題しらす

讀人しらす

なでしこの花ちり方になりけり我がまつ秋ぞ近くなるらし
よひながら晝にもあらなむ夏なれば待ち暮すまの程なかるべく
夏の夜の月は程なく明けぬれどあしたのまをぞかこちよせつる
かささぎの峯とびこえてなきゆけば夏の夜わたる月ぞ隠るる
秋近み夏はてゆけばほととぎす鳴く聲かたきこちこそすれ

桂のみこの螢を捕へてといひはべりければ童の

かざみの袖につつみて

つつめども隠れぬ物は夏蟲の身よりあまれるおもひなりけり

題しらす

天の川水まさるらしなつの夜はながるる月のよどむまもなし

月頃わづらふ事ありてまかりありきもせでまで

こぬよしいひて文のおくに

貫之

花もちり郭公さへいぬるまできみにも行かずなりにけるかな

かへし

藤原雅正

花鳥の色をも音をもいたづらに物憂かる身はすぐすのみなり

題しらす

讀人しらす

夏蟲の身をたきすてて魂しあらば我とまねばむ人めもる身ぞ

夏の夜月おもしろく侍りけるに

こよひかくながむる袖のつゆけきは月の霜をや秋とみつらむ

みな月祓しに河原にまかり出でて月のあかきを

見て

賀茂川の水底すみて照る月をゆきて見むとやなつばらへする

みな月二つありける年
たなばたは天の川原を七かへり後のみそかをみそぎにはせよとイ

後撰和歌集 卷第五

秋歌上

是貞の親王の家の歌合に

讀人しらす

俄にも風のすすしくなりぬるか秋たつ日とはむべもいひけり
題しらす

うちつけにもものぞ悲しき木の葉ちる秋の初をけふぞと思へば

物思ひける頃秋立つ日人につかはしける

たのめこし君はつれなし秋風はけふよりふきぬ我が身悲しも

思ふ事侍りける頃

いとどしく物思ふ宿の萩の葉にあきとつけつる風のわびしさ

題しらす

秋かぜのうちふきそむる夕ぐれはそらに心ぞわびしかりける

大江千里

露^わかけし袂ほすまもなきものをなどあき風のまだき吹くらむ

女のもとよりふみ月ばかりにいひおこせて侍り

讀人しらす

秋萩をいろどる風の吹きぬれば人のころもうたがはれけり

かへし

在原業平朝臣

あき萩をいろどるかぜはふきぬとも心はかれじ草葉ならねば

源昇朝臣時々まかり通ひける時に文月の四五日

ばかりに七日の日の料に装束てうじてといひつ

かはして侍りければ

閑院

逢ふ事は柵^{はら}機^{はた}女にとひしくてたちぬふ業はあえずぞありける

題しらす

讀人しらす

天の川わたらむそらもおもほえずたえぬ別とおもふものから

七月七日に夕方までこむといひて侍りけるに雨

源中正

雨ふりて水まさりけり天の川こよひはよそに戀ひむとやみし

かへし

讀人しらす

水まさり浅き瀬しらすなりぬとも天のとわたる舟^{ふね}はなしやは

七日の日に女の許に遣しける

藤原兼三

たなばたも逢^あふ夜^せありけり天の川此わたりには渡る瀬もなし

かれにける男の七日の夜まできたりければ女の

よみて侍りける

讀人しらす

ひこ星の稀はあふ褥の床なつは^{れば}うちはらへども露けかりけり

七日人のもともより返事にこよひあはむといひお

こひこひ可逢むと思ふ夕暮はたなばたつめも斯くやあるらし

類なき物とはわれぞなりぬべきたなばたつめは人めやはもる

天の川流れて戀ひばうくもぞあるあはれと思ふせに早くみむ

玉かづらたえぬものからあら玉の年のわたりはただ一夜のみ

契りけむ言の葉今はかへしてむ年のわたりによりぬるものを

七日の日に越後の藏人につかはしける

藤原敦忠朝臣

逢ふことの今宵すぎなば棚機におとりやしなむ戀はまさりて

七日

讀人しらす

棚機にあまの戸わたる今宵さへをちかた人のつれなかるらむ

七夕をよめる

天の川とほきわたりはなけれども君がふなでは年にこそまて

天の川岩こすなみの立ちるつつ秋のなぬかの今日をしぞまつ

紀 友 則

今日よりや天の川原はあせななむ底ひともなくただ渡りなむ

讀人しらす

天の川ながれてこふるたなばたの涙なるらしあきのしらつゆ

天の川せぜの白波たかけれただわたり來ぬまつにくるしみ

秋くれば川霧わたる天の川かはかみ見つつこふる日のおほき

天の川こひしきせにぞ渡りぬるたぎつなみだに袖はぬれつつ
たなばたの年あかぬいとはいはじ天の川雲立ちわたりいざみだれなむ
秋の夜のあかぬいながきわかれを柵機はたてぬきにこそ思ふべらなれ

七月八日のあしたに

兼輔朝臣

たなばたの歸るあしたの天の川ふねもかよはぬ波もたたなむ

おなじ心を

貫之

朝戸あけてながめやすらむ柵機はあかぬ別のそらをこひつつ

思ふこと侍りて

讀人しらす

秋風の吹けばさすがに侘しきは世のことわりと思ふものから

題しらす

業平朝臣

まつむしの初聲さそふあきかぜは音羽山より吹きそめにけり

行くほたる雲の上までいぬべくは秋風吹くとかりにつけこせ

讀人しらす

秋風のいに草葉そよぎて吹くなべにほのかにしつるひぐらしの聲

貫之

ひぐらしの聲さく山の近けれや鳴きつるなべに夕日さすらむ

讀人しらす

日ぐらしの聲さくからにまつ蟲の名にのみ秋をおもふ頃かな
心ありて鳴きもしつるか日ぐらしの何れも物のあきてはいうければ
秋風の吹きくる背はきりぎりす草の根ごとに鳴きみだれけり
わがごとく物や悲しききりぎりす草のやどりに聲たえずなく
來むといひしほどや過ぎぬる秋の野に誰まつ蟲ぞ聲の悲しき
秋の野に來宿る人もおもほえずたれをまつ蟲こころなくらむ

秋風のやや吹きしけば野をさむみわびしきこゑに松蟲ぞ鳴く

藤原元善朝臣

行きくれば野もせに蟲のおり亂る聲のあやをば誰かきるらむ

讀人しらす

秋さむみ鳴くまつむしの涙こそ草葉いろどるつゆと置くらめ

秋風の吹きしく松は山ながらなみ立ちかへるおとぞきこゆる

是貞のみこの家の歌合に

壬生忠岑

まつのねに風のしらべをまかせては龍田姫こそ秋はひくらし

秋大輔がうづまさの傍なる家に侍りけるに萩の

葉に文をさしてつかはしける

左大臣

山里のものさびしきは萩の葉のなびくごとにぞ思ひやらるる

題しらす

小野道風朝臣

穂には出でぬいかにかせ^{すべき}まし花薄身を秋風にすてや果ててむ

二人の男に物いはれ^{ひい}ける女のひとりにつきにけ

れば今ひとりがいひつかはしける

讀人しらす

明け暮し守るたのみをからせつつ袂そほづの身とぞなりぬる

かへし

心もおふる山田のひつち穂は君まもらねどかるひともし

題しらす

藤原守文

草の糸にぬく白玉とみえつるは秋のむすべる露にぞありける

後撰和歌集 卷第六

秋歌中

延喜の御時に秋の歌めしありければ奉りける 紀 貫 之

秋霧のたちぬる時はくらぶ山おほつかなくぞ見えわたりける

花見にと出でにしものを秋の野の霧にまよひて今日は暮しつ

寛平の御時后の宮の歌合に 讀人しらす

うらちかくたつ秋霧はもしほやく煙とのみぞ見えわたりける

おなじ御時の女郎花合に 藤原興風

折るからに我が名はたちぬ女郎花いざおなじくば花々に見む

讀人しらす

秋の野のつゆにおかるる女郎花はらふ人なみぬれつつやふる
女郎花はなの心のあだなればあきにのみこそあひわたりけれ

母のぶくにて里に侍りけるに先帝の御文給へり

ける御返事に 近江衛₁ 更衣

さみだれにぬれにし袖にいとどしく露おきそふる秋の佗しさ

御かへし 延喜御製

おほかたも秋は佗しきときなれど露けかるらむ袖をしぞ思ふ

亭子院の御前の花のいと面白く朝露のおけるを

めして見せさせたまひて 法皇御製

白露のかはるも何か惜しからむありての後もややうきものを

御かへし 伊勢

植ゑたてて君がしめゆふ花なれば玉と見えてや露もおくらむ

大輔が後涼殿に侍りけるに藤壺より女郎花を折
りてつかはしける

右 大 臣

折りてみる袖さへぬるる女郎花つゆけきものと今やしるらむ

かへし

大 輔

萬代にかからむつゆを女郎花なにおもふとかまだき濡るらむ

又

右 大 臣

置き明す露のよなよな經にければまだきぬるとも思はざりけり

かへし

大 輔

いまははやうちとけぬべき白露の心おくまで夜をやへにける

あひしりて侍りける女のだ名たちて侍りけれ

ば久しく訪はざりけり八月ばかりに女の許より

などかいつれなきといひおこせて侍りければ

讀人しらす

白露のうへはつれなくおきるつつ萩の下葉のいろをこそみれ

かへし

伊 勢

心なき身は草葉にもあらなくにあきくる風にうたがはるらむ

男のもとに遣しける

讀人しらす

人はいさことぞともなきながめにも我は露けき秋も知らるる

人のもとに尾花のいと高きを遣したりければ返

事に忍草をくはへて

中 宮 宣 旨

はなすすきほに出ることみな宿は昔しのぶの草をこそ見れ

かへし

伊 勢

宿もせに植ゑなめつつぞわれはみる招く尾花に人やとまると

題しらす

讀人しらす

秋の夜を徒にのみおきあかす露はわが身のうへにぞありける

おほかたに置く白露もいまよりは心してこそ見るべかりけれ

右大臣

露ならぬ我が身と思へど秋ばいの夜をかくこそ明せおきるながらに

秋のころほひある所に女どもの數多みすの内に

侍りけるに男の歌のもとをいひ入れて侍りけれ

ば末はうちより

讀人しらす

白露のおくにあまたの聲すれば花のいろいろ有りとしらなむ

八月中の十日ばかりに雨のそほ降りける日女郎

花ほりに藤原のもろただを野邊にいだして遅く

歸りければつかはしける

左大臣

暮れはてば月もまつべし女郎花あめやめてとは思はざらなむ

題しらす

讀人しらす

秋の田のかりほの庵宿いの匂ふまで咲ける秋萩みれどあかぬかも

秋の夜をまどろますのみ明す身は夢路とだにも頼まざりけり

萩の花を折りて人につかはすとて

時雨ふりふりなば人にみせもあへず散りなばをしみをれる秋萩

秋の歌とて

貫之

往きかへり折りてかざさむ朝な朝な鹿立ちならす野邊の秋萩

宗于朝臣

我が宿の庭の秋萩ちりぬめりのち見む人やくやしとおもはむ

讀人しらす

白露のおかまくをしき秋萩を折りてはさらにわれやかざさむ

年の積りにける事をかれこれ申しけるついでに貫之

秋萩の色づく秋時いをいたづらにあまたかぞへて老いぞしにける

題しらす

天智天皇御製

秋の田のかりほの庵のとまをあらみ我が衣手は露にぬれつつ

讀人しらす

わがそでに露ぞおくなる天の川くものしがらみ波やこすらむ
秋萩のえだもとををになりゆくは白露おもくおけばなりけり
わがやどの尾花がうへの白露をけたすて玉にぬくものにもが

延喜の御時歌めしければ

貫之

さを鹿のたちならず小野の秋萩における白露われもけぬべし
秋の野の草は糸とも見えなくに置くしらつゆを玉とぬくらむ

文屋朝康

白露にかぜのふきしく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞちりける

忠岑

秋の野におく白露をけさ見れば玉やしけるとおどろかれつつねろい

題しらす

讀人しらす

おくからに千ぐさの色になるものを白露とのみ人のいふらむ
白玉の秋の木の葉にやどれると見ゆるは露のはかるなりけり
秋の野に置く白露のきえざらば玉にぬきてもかけて見てまし
唐衣そでくつるまでおく露は我が身をあきの野とやみるらむ
大空に我が袖ひとつあらずかなしく露やわきておくらむ
朝ごとにおく露そでにうけたとためて世のうきときの涙にぞかる

秋の歌とてよめる

貫之

秋の野の草もわけぬを我が袖の物思ふなべにつゆけかるらむ
いくよへて後かわすれむ散りぬべき野邊の秋萩みがく月夜を

深養父

秋の夜の月のかけこそ木のまよりおちば衣と身にうつりけれ
 袖にうつる月のひかりは秋ごとに今宵かはらぬ影とみえつつ
 秋の夜のつきにかさなる雲はれて光さやかに見るよしもがな

秋の池の月のうへこぐ船なればかつらのえだに棹やさすはらすむ
 小野美材

秋の海にうつれる月をたちかへり波はあらへど色もかはらず
 深養父

是貞のみこの家の歌合に
 秋の夜の月のひかりは清けれど人のこころのくまは照らさず
 秋の月常にかく照るものならば闇にふる身はまじらざらまし
 読人しらす
 藤原雅正

八月十五夜

藤原雅正

いつとても月みぬ秋はなきものをわきてこよひの珍しきかな

読人しらす

月かけはおなじひかりの秋の夜をわきて見ゆるは心なりけり

紀淑望光朝臣

月を見て

空とほみ秋やよくらむひさかたの月のかつらの色もかはらぬ

貫之

ころもでは寒くもあらねど月影をたまらぬ秋の雪とこそ見れ

読人しらす

天の川しがらみかけてとどめなむあかず流るる月やよどむと
 あきかぜに波やたつらむ天の川わたる瀬もなく月のながるる
 秋くれば思ふ心ぞみだれつつまづもみぢ葉とちりまさりける

深養父

消えかへりものおもふ秋の衣こそなみだの川の紅葉なりけれ

読人しらす

吹く風にふかきたのみのむなしくば秋の心をあさしと思はむ

是貞のみこの家の歌合の歌

秋の夜は人を静めてつれづれとかきなす琴の音にぞなきぬる

藤原 濟 正

露をよめる
ぬきとむる秋しなければ白露のちぐさにおける玉もかひなし

八月十五夜

秋風にいとど更けゆく月影を立ちなかくしそあまのかはぎり

延喜の御時秋の歌めしありければ奉りける

をみなへし匂へる秋の武藏野は常よりもなほむつまじきかな

人につかはしける

兼 覽 王

之

秋霧のはるるはうれし女郎花たちよる人やあらむとおもへば

題しらす

読人しらす

をみなへし草むらごとむれたつは誰まつ蟲の聲にまよふぞ

女郎花ひる見てましを秋の夜の月のひかりはくもがくれつつ

をみなへし花のさかりに秋風のふくゆふぐれを誰にかたらむ

貫 之

しろたへの衣かたしき女郎花さける野邊にぞこよひねにける

名にしおへばはいしひてたのまむ女郎花花の心のあきはうくとも

躬 恒

たなばたに似たるものかな女郎花秋よりほかにあふ時もなし

読人しらす

秋の野によるもや寐なむ女郎花はなの名をにいのみ思ひかけつつ

をみなへし色にもあるかな松蟲をもとに宿して誰を待つらむ

前栽にをみなへし侍りける所にて

女郎花匂ふさかりを見る時ぞわが老いらくはくやしかりける

すまひのかへりあるじの暮つかた女郎花を折り

て敦慶の親王のかざしにさすとて

三條右大臣

女郎花はなの名ならぬ物ならばなにかは君がかざしにもせむ

年ごろ家のむすめにせうそこ通はし侍りけるを女のために

かるがるしなどいひてゆるさぬあひだになむ侍りける

法皇伊勢が家のをみなへしをめしければ奉るを 枇杷左大臣

ききて

女郎花をりけむ枝のふしごと袖に過ぎにし君をおもひ出やせし

かへし

伊

勢

女郎花折りも折らずもいにしへを更にかくべき物ならなくに

後撰和歌集 卷第七

秋歌下

題しらす

讀人しらす

藤袴きるひとなみやたちながらしぐれの雨にぬらし初めぬる
秋かぜにあひとしあへば花薄いづれともなく穗にぞいでぬる

寛平の御時后の宮の歌合に

在原棟梁

花薄そよともすれば秋かぜの吹くかとぞきくひとりぬる夜は

題しらす

讀人しらす

花薄ほに出でやすき草なればみにならむとはたのまれなくに
秋風にさそはれ渡るかりがねは雲井はるかに今日ぞきこゆる

越の方に思ふ人侍りける時に

貫之

秋の夜に雁かもなきて渡るなりわが思ふ人のことづてやせし

題しらす

秋風に霧とびわけてくる雁のちよにかはらぬこゑきこゆなり

讀人しらす

物思ふと月日のゆくもしらざりつ雁こそ鳴きて秋とつけけれ

大和にまかりけるついでに

かりがねの鳴きつるなべに唐衣たつたのやまは紅葉しにけり

題しらす

秋風にさそはれわたる雁がねはものおもふ人の宿をよかなむ
誰きけと鳴くかりがねぞ我が宿の尾花が末を過ぎがてにして
往き返りここもかしこも旅なれやくる秋毎にかりかりとなく

秋毎にくれど歸ればたのまぬを聲にたてつつかりとのみなく
一向ひたすらに我がおもはなくに己さへかりかりとのみ鳴き渡るらむ

人の雁は來にけると申すを聞きて

躬

恒

年ごとに雲路まどはぬかりがねは心づからやあきを知るらむ

大和にまかりける時これかれともにて

讀人しらす

天の川かりぞとわたるさほ山のこずゑはむべも色づきにけり

兼輔の朝臣左近少將に侍りける時武藏の御馬む

かへにまかりたつ日俄にさはる事ありてかはり

に同じつかさの少將にてむかへにまかりて逢坂

より隨身を返していひ送り侍りける

藤原忠房朝臣

秋霧のたち野の駒をひくときはこころにのりて君ぞこひしき

題しらす

在原元方

いそのかみふる野の草も秋は猶色ことにこそあらたまりけれ

讀人しらす

秋の野の錦のごとも見ゆるかな色なき露はそめじとおもふに

秋の野にいかなる露の置きつめばちぢの草葉の色かはるらむ

いづれをかわきて忍ばむ秋の野にうつろはむとて色かはる草

紀 友 則

聲たてて鳴きぞしぬべき秋霧に友まどはせる鹿にはあらねど

讀人しらす

たれきけと聲たかさごにさを鹿の長々し夜をひとり鳴くらむ

うちはへてかけとぞたのむ峯の松いろどる秋の風にうつるな

初時雨ふれば山べちぞおもほゆるいづれの方かまづもみづらむ

妹がひもとくとむすぶとたつたやま今ぞもみぢの錦おりける

雁なきてさむきあしたの露ならし龍田の山をもみだすものは
見る毎に秋にもなるかな龍田姫もみぢそむとや山もきるらむ

源宗于朝臣

あづさゆみいるさの山は秋霧のあたるごとにや色まさるらむ

はらからどちいかなる事か侍りけむ

讀人しらす

君とわれいもせの山も秋くれば色かはりぬる物にぞありける

題しらす

元方

遅く疾く色づく山のもみぢ葉はおくれさきだつ露や置くらむ

龍田山をこゆとて

友則

かくばかりもみづる色のこければや錦たつたの山といふらむ

題しらす

讀人しらす

からころも龍田の山のもみぢ葉はものおもふ人の袂なりけり

もる山を越ゆとて

貫之

あしびきの山のやまもりもる山も紅葉せさする秋はきにけり

題しらす

唐錦たつたのやまもいまよりは紅葉ながらにときはならなむ

唐衣たつたのやまのもみぢ葉ははた物もなきにしきなりけり

人々もろともに濱づらをまかる道に山の紅葉を

これかれよみ侍りけるに

忠岑

いく木ともえこそ見わかね秋山のもみぢの錦よそにたてれば

題しらす

讀人しらす

秋風のうち吹くからにやまも野もなべて錦におりかへすかな

などさらにあきかとはむ唐錦たつたのやまの紅葉するよを

あだなりと我は見なくにもみぢ葉を色の變れる秋しなれば

たまかづら葛城山のもみぢ葉はおもかけにのみ見え渡るかな
秋霧の立ちしかくせばもみぢ葉は覺束なくも散りぬべらなり

貫之

鏡山をこゆとて

素性法師

鏡山やまかきくもりしぐるればもみぢあかくぞ秋は見えける

隣に住み侍りける時九月八日伊勢が家の菊に綿

をきせに遣しければ又の朝折^{あした}りてかへすとて

伊勢

かずしらす君が齡をのばへつつなだたるやどの露^しとならなむ

かへし

藤原雅正

露だにもなだたる宿の菊ならば花のあるじやいくよなるらむ

なが月の九日鶴のなくなり^しにければ

伊勢

菊の上に置きるべくもあらなくに千年の身をも露になす哉

題しらす

讀人しらす

菊の花なが月ごとに咲きくればひさしきこころ秋や知るらむ
名にしおへば長月ごとに君がため垣根の菊はにほへとぞ思ふ

ほかの菊を移しうゑて

故郷をわかれて咲ける菊のはなたびながらこそ匂ふべらなれ

男の久しくまでこざりければ

なににきく色そめかへし匂ふらむ花もてはやす君もこなくに

月の夜に紅葉のちるを見て

もみぢ葉の散りくる見れば長月のありあけの月の桂^{りけり}なるらし

題しらす

いくちはた織ればか秋の山ごとにかぜにみだるる錦なるらむ
なほざりに秋のやまぢを越えくればおらぬ錦をきぬ人ぞなき

もみぢ葉を分けつつゆけば錦きて家にかへると人や見るらむ

貫之

うちむれていざわぎもこが鏡山こえて紅葉の散らむかけみむ

讀人しらす

山風の吹きまにまに紅葉もみぢはこのもかのもに散りぬべらなり
秋の夜に雨ときこえて降りつるは風にみだるる紅葉なりけり
立ちよりに見るべき人のあればこそ秋のはやしに錦しくらめ
木のもとに織らぬ錦のつもれるは雲のはやしの紅葉なりけり
あきかぜに散るもみぢ葉は女郎花やどにおりしく錦なりけり
足引のやまのもみぢ葉散りにけり嵐のさきに見てましものを
もみぢ葉のふりしく秋の山邊こそたちてくやしき錦なりけれ
龍田川いろくれなるになりにけり山のもみぢぞ今はちるらし

貫之

たつたがは秋にしなれば山ちかみ流るる水ももみぢしにけり

讀人しらす

もみぢばの流るる秋は川ごとにしきあらふと人や見るらむ
龍田川あきは水なくあせななむあかぬ紅葉のながるればをし

文屋朝康

波わけて見るよしもがなわたつ海の底のみるめも紅葉ちるやと

藤原興風

木の葉ちる浦に波たつ秋なればもみぢに花も咲きまがひけり

讀人しらす

わたつみの神にたむくる山姫のぬさをぞ人は紅葉といひける

貫之

ひぐらしの聲もいとなくきこゆるは秋夕暮になればなりけり

讀人しらす

風の音のかぎりと秋やせめつらむ吹きくるごとに聲の侘しき

もみぢ葉にたまれる雁の涙には月のかけこそうつるべらなれ

あひ知りて侍りける男の久しうとはず侍りけれ

右 近

ば長月ばかりにつかはしける

おほかたの秋の空だに侘しきに物思ひそふる君にもあるかな

讀人しらす

我がごとく物思ひけらし白露の夜をいたづらにおき明しつ

あひしりて侍りける人のちのちまでこそなりに

ければ男の親聞きてなほまかりとへと申し教ふ

とききて後まうできたりければ

平伊望朝臣女

秋ふかみよそにのみきく白露のたが言の葉にかかるなるらむ

かれにける男の秋うとくとぶらへりけるに

昔の承香殿のあこぎ

とふことの秋しもまれうとくに聞ゆるはかりにや我を人のたのめし

紅葉とくと色こきさいでとを女のもとに遣して

源ととのふ

君とくこふる涙にぬるるわがそでと秋のもみぢといづれまされり

題しらす

讀人しらす

照る月の秋しも殊にさやけきは散るもみぢ葉を夜も見よとか

故宮の内侍に兼輔朝臣しのびてかよはし侍りけ

る文をとりてかきつけて内侍に遣しける

など我が身下葉紅葉となりにけむ同じなけきの枝にこそあれ

秋やみなる夜かれこれ物語し侍るあひだに雁の

なきて渡りければ

源わたすの朝臣

あかからば見るべき物を雁がねの何處ばかりに鳴きて行くらむ

菊の花折れりとて人のいひ侍りければ 讀人しらす

いたづらに露におかるる花かとて心もしらぬひとや折りけむ

身のなりいでぬ事など歎き侍りける頃紀友則が

もとよりいかにぞととぶらひにおこせて侍りけ

れば返事に菊の花を折りてつかはしける 藤原忠行

枝も葉も移ろふ秋の花みればはてはかけなくなりぬべらなり

かへし 友則

しづくもて齡のぶてふ花なれば千代の秋にぞかけはしけらむ

延喜の御時秋の歌めしありければ奉りける 貫之

秋の月光さやけみもみぢ葉のおつるかけさへ見えわたるかな

題しらす 讀人しらす

秋風につらをはなれぬ雁がねは春かへるともかはらざらなむ

をとこの花かづらゆはむとて菊ありける所にこ

ひに遣したりければ花につけて遣しける

みな人に折られにけりとときくの花君のためにぞ露はおきける

題しらす

吹く風にまかする船や秋の夜の月のうへよりけふは漕ぐらむ

紅葉のちりつもれるもとにて

紅葉はちる木の下にとまりけり過ぎ行く秋やいづちなるらむ

忘れにける男の紅葉を折りて送りて侍りければ

思ひ出でてとふにはあらじあきはつる色の限を見するなりけり

長月のつごもりの日もみぢに氷魚をつけておこ

せたりければ ちかねがむすめ

宇治山の紅葉をみずは長月の過ぎゆくひをも知らずぞあらまし

九月つごもりに

貫

之

なが月の有明の月晦日にはありながらはかなく秋は過ぎぬべらなり

同じ夜

躬

恒

いづかたに夜はなりぬらむおほつかぞとなあけぬ限は秋と思はむ

後撰和歌集 卷第八

冬 歌

題しらす

讀人しらす

初時雨ふれば山邊ぞおもほゆるいづれの方かまづもみづらむ
初しぐれ降るほどもなく佐保山の梢あまねくうつろひにけり
神無月ふりみふらすみ定めなきしぐれぞ冬のはじめなりける
冬くればさほの河瀬にゐるたづも獨ねがたき音をぞ鳴くなる
ひとりぬる人のきかくに神無月にはかにもふる初しぐれかな
秋はてて時雨ふりぬるわれなれば散る言の葉をなにか恨みむ
吹く風はいろも見えねど冬くれば獨ぬる夜の身にぞしみける

秋はてて我が身しぐれとふりぬれば言の葉さへに移ひにけり
神無月時雨ばかりは降らずしてゆきがてにさへなどかなるらむ
神無月しぐれとともに神なびの森の木の葉はふりにこそふれ
女につかはしける

頼む木も枯れはてぬれば神無月しぐれにのみもぬるる袖かな
山へいにいるとて

増基法師

神無月しぐればかりを身にそへて知らぬ山路に入るぞ悲しき

十月ばかりに大江千古がもとにあはむとてまか
りたりけれども侍らぬほどなれば歸りまできて
たづねて遣しける

藤原忠房朝臣

もみぢ葉はをしき錦とみしかども時雨と共に降りてこそこし
かへし

大江千古

もみぢ葉も時雨もつらし稀にきて歸らむ人を降りやとどめぬ

題しらす

讀人しらす

神無月かぎりと思ふもみぢ葉のやむ時もなく夜さへにふる

ちはやぶる神垣山のさかき葉はしぐれに色もかはらざりけり

すまぬ家にまできてもみぢばにかきていひつか

はしける

枇杷左大臣

人すまずあれたる宿をきてみればいまぞ木の葉は錦おりける

かへし

伊勢

涙さへ時雨にそひてふるさとは紅葉のいろもこさまさりけり

題しらす

讀人しらす

冬の池の鴨のうは毛におく霜のきえて物思ふ頃にもあるかな

親の外にありて遅くかへりければ遣しける

人の娘のやつなりける

神無月しぐれふるにもくるる日を君まつほどは長しとぞ思ふ
題しらす

身をわけて霜やおくらむあだ人の言の葉さへに枯れも行く哉

冬の日むさしに遣しける

人しれず君につけてし我が袖のけさしも解けず氷るなるべし
りけり

題しらす

かきくらし霰ふりしけしらたまをしける庭とも人の見るべく
神無月しぐるる時ぞみよし野の山のみゆきも降りはじめける
けさの嵐さむくもあるかな足引の山かきくもり雪ぞふるらし
黒髪の白くなり行く身にしあればまづ初雪をあはれとぞ見る
霰ふるみやまの里のわびしきは来てたはやすくとふ人ぞなき
ちはやぶる神無月こそ悲しけれ我が身時雨しぐれにふりぬと思へば

式部卿敦實のみこ忍びてかよふ所はべりけるを
のちのちたえだえになりたる侍りければころほひ妹の前齋
宮のみこの許よりこの女のもとにこの頃はいか
にぞとありければ其返事に女

白山にゆきふりぬればあとたえて今はこしぢに人もかよはず
雪のあした老を歎きて
貫 之

降りそめて友まつ雪はむばたまのわが黒髪のかはるなりけり
かへし
兼 輔 朝 臣

黒髪の色ふりかふる白雪のまちいづる友はうとくぞありける
又 貫 之

黒髪と雪との中のうきみれば友かがみをもつらしとぞおもふ
かへし
兼 輔 朝 臣

年ごとにしらがの敷をますかがみ見るにぞ雪の友は知りける

題しらす

讀人しらす

年ふれどいろもかはらぬ松が枝にかかれる雪を花とこそみれ
しもがれの枝となわびそ白雪のきえぬかぎり花とこそ見れ
こほりこそ今はすらしもみ吉野の山の瀧つ瀬こゑもきこえず
夜を寒みね覺てきけば鶯うぐいすぞ鳴くはらひもあへず霜やおくらむ

雪のすこしふる日女に遣しける

藤原かけもと

かつきえて空もみだるる沫雪は物おもふ人のこころなりけり

師氏朝臣のかりして家の前よりまかりけるをき

きて

讀人しらす

白雪のふりはへてこそ訪はざらめとくる便たよりをすぐさざらなむ

題しらす

思ひつつ寐なくにあくる冬の夜の袖の氷は解けずもあるかな
あらたまの年をわたりてあるが上にふりつむ雪のたえぬ白山
まこもかる堀江にうきてぬる鴨の今宵の霜にいかになぶらむ
白雪のおりる山とみえつるは降りつむ雪のきえぬなりけり
故郷のゆきは花とぞふりつもるながむるわれも思ひきえつつ
流れゆく水こほりぬる冬さへやなほうき草のあととはとどめぬ
心あてに見ばこそわかめ白雪のいづれか花の散るにたがへる
あまのがは冬は氷にとぢたれや石間にたぎつおとだにもせぬ
おしなべて雪のふれば我が宿の杉をたづねてとふ人もなし
冬の池の水にながるあしかもの浮寐ながらに幾夜へぬらむ
山ちかみめづらしけなくふる雪の白くやならむ年つもりなば
松の葉にかかれる雪のうれをこそ冬の花とはいふべかりけれ

降る雪はきえでもしばしとまらなむ花も紅葉も枝になきころ
涙川身なぐばかりのふちはあれど氷とけねば行くかたもなし
降る雪に物思ふわが身おとらめや積り積りて消えぬばかりぞ
よるならば月とぞみまし我が宿の庭しろたへにふりつもの雪
梅が枝に降りおける雪を春近みめのうちつけに花とこそ見れ
いつしかと山の櫻もわがごとや年のこなたにはるをまつらむ
年ふかくふりつむ雪を見るときぞこの白根にすむ心地する
年くれてはるあけがたになりぬれば花のためしにまがふ白雪
春ちかくふる白雪はをぐらやまみねにぞ花のさかりなりける
冬の池にすむにほ鳥のつれもなく下にかよはむ人にしらすな
むばたまのよるのみ降れる白雪はてる月影のつもるなりけり
この月のとしのあまりにたらざらば鶯ははや鳴きぞしなまし

關こゆる道とはなしにちかながら年にさはりて春をまつかな
みくしけどのの別當に年をへていひわたり侍り
けるをえあはずして其年のしはずのつごもりの
日遣しける

藤原敦忠朝臣

物思ふと過ぐる月日も知らぬまに今年もけふに果てぬとかきく

後撰和歌集 卷第九

戀歌一

からうじてあひしりて侍りける人につつむ事ありて又あひがたく侍りければ

源宗于朝臣

東路のさやの中山なかなかにあひみてのちぞわびしかりける

忍びたりける人に物語し侍りけるを人のさわが

しく侍りければまかりかへりて遣しける

貫之

曉をなにかいひけむ別るればよひもいとこそわびしかりけれ

源おほきが通ひけるを後々はまからずなり侍り

にければ隣の壁のあなよりをほきをはつかに見

て遣しける

するが

まどろまぬかべにも人を見つるかな正ましからなむ春の夜の夢

あひしりて侍りける人のもとに返事見むとてつ

かはしける

元良親王

くやくやと待つ夕暮といまはとてかへる朝あしたといづれまされる

かへし

藤原かつみ

夕暮はまつにもかかる白露のおくるあしたや消えははつらむ

大和にあひしりて侍りける人のもとにつかはし

ける

讀人しらす

うちかへし君ぞ戀しき大和なるふるのわさ田の思ひ出でつつ

かへし

秋の田のいねてふ事をかけしかば思ひ出づるが嬉しけもなし

女につかはしける

人こふる心ばかりはそれながら我はわれにもあらぬなりけり

まかる所しらせず侍りける頃又あひしりて侍り

ける男のもとより日頃尋ね侘びてうせにたると

なむ思ひつるといへりければ

伊

勢

思川たえずながるる水のあわのうたかた人にあはで消えめや

題しらす

三統公忠

おもひやる心はつねに通へどもあふ坂の關こえずもあるかな

女につかはしける

讀人しらす

消え果ててやみぬばかりか年をへて君をおもひの驗しるしなければ

かへし

思ひだに驗なしてふ我が身にぞあはぬなけきの數はもえけれ

題しらす

ほしがてに濡れぬべきかな唐衣乾くたものよよになければ

よと共にあぶくま川の遠ければそなる影を見ぬぞわびしき

わがごとくあひおもふ人のなき時は深き心もかひなかりけり

いつしかと我がまつ山はいに今はとてこゆなる波にぬるる袖かな

女のもとにつかはしける

人ごとは誠なりけりしたひもの解けぬにしるき心とおもへば

結び置きし我が下紐の今までにとけぬは人のこひぬなりけり

女のもとに遣しける

ほかの瀬は深くなるらし飛鳥川きのふの淵ぞ我が身なりける

かへし

淵瀬ともいさやしら波たち騒ぐ我が身ひとつはよる方もなし

題しらす

光まつつゆに心をおける身はきえかへりつつ世をぞうらむる

ある所にあふみといひける人のもとにつかはし

ける

貫

之

汐みたぬ海ときけばやよと共にみるめなくして年のへぬらむ

あつよしの親王まうできたりければ逢^どはずして

かへして又のあしたに遣しける

桂のみこ

唐衣きてかへりにしき夜すがらあはれと思ふを恨むらむはた

あひ待ちける人の久しう消息なかりければ遣し

ける

紀のめのと

影だにも見えすなりゆく山の井は浅きよりまた水やたえにし

かへし

平定女

浅してふ事をゆゆしみ山の井はほりしにごりに影はみえぬぞ

題しらす

讀人しらす

幾たびかいく田の浦に立ちかへる波に我が身をうち濡すらむ

かへし

立ち歸りぬれては干ぬる汐なれば生田の浦のさがとこそみれ

女の許に

逢ふ事はいとど雲井の虚空に立つ名のみしてやみぬばかりか

かへし

よそながらやまむともせず逢ふ事は今こそ雲の絶間なるらめ

又をとこ

今^{とのみ}のみと頼むなれども白雲のたえまはいつか有らむとすらむ

かへし

をやみせず雨さへふれば澤水のまさるらむとも思ほゆるかな

題しらず

夢にだに見ることぞなき年を経て心のどかにぬる夜なければ
見そめずてあらまし物を唐衣たつ名のみしてきる夜なきかな

女のもとに遣しける

かれはつる花の心はつらからで時すぎにける身をぞうらむる

かへし

あだにこそ散ると見るらめ君にみなうつろひにける花の心を

その程に歸りこむとて物にまかりける人の程を

過ぐしてござりければ遣しける

こむといひし月日を過す姨捨の山のはつらき物にぞありける

かへし

月日をも數へけるかな君こふる數をもしらぬ我が身なりけり

女に年をへて心ざしある由をのたまひわたりけ

るを女なほ今年をだに待ちくらせとたのめける

をその年もくれてあくる春までいとつれなく侍

りければ

このめはる春の山田をうちかへし思ひやみにし人ぞこひしき

心ざしありながらえあはず侍りける女のもとに

つかはしける

ころをへてあひみぬ時はしらたまの涙も春はいろまさりけり

かへし

人こふる涙は春ぞぬるみけるたえぬおもひのわかすなるべし

男のここかしこに通ひすむ所おほくて常にしも

贈太政大臣

伊勢

とはざりければ女も又いろごのみなる名たちけ
るを恨み侍りける返事に

源たのむがむすめ

つらしともいかがうらみむ郭公わがやどちかく鳴く聲はせて

かへし

あつよしのみこ

里ごとになきこそ渡れほととぎすすみか定めぬ君たづぬとて

えがたかるべき女を思ひかけてつはしける

春道列樹

數ならぬみやまぐれの郭公ひとしれぬ音をなきつつぞふる

いと忍びたる女にあひ語らひて後人めにつつみ

て又あひ難く侍りければ

これただのみこ

あふ事のかた糸ぞとは知りながら玉の緒ばかり何によりけむ

女の許より忘草に文をつけておこせて侍りければ 讀人しらす

思ふとはいふ物からにともすれば忘るる草の花にやはあらぬ

かへし

たいふのごといひける

植ゑてみる我は忘れであだ人にまづ忘らるる花にぞありける

平定文が許より難波の方へなむまかるといひお

くりて侍りければ

土

佐

浦わかずみるめかるてふあま蠶の身はなにか難波の方へしもゆく

かへし

定

文

君を思ふ深さくらべに津の國の堀江みにゆく我にやはあらぬ

つらくなりにける人につかはしける

伊

勢

いかでかく心一つをふたしへに憂くもつらくもなして見すらむ

題しらす

讀人しらす

ともすれば玉にくらべしますかがみ人の寶と見るぞかなしき

忍びたる人につかはしける

磐瀬山たにのした水うちしのび人のみぬまはながれてぞふる
人をあひしりて後久しう消息も遣さざりければ
嬉しけに君が頼めし言の葉はかたみに汲める水にぞ有りける

題しらす

行きやらぬ夢路にまどふ袂にはあまつそらなき露やおくらむいぞおきける
身ははやく奈良の都となりにしを戀しき事のまたもふりぬるかい
住吉のきしの白波よるよるは海士かのよそめに見るぞかなしき
君こふとぬれにし袖の乾かぬはおもひの外ほかにあればなりけり
あはざりし時いかなりしものとてか唯今のまも見ねば戀しき
世の中に忍ぶる戀のわびしきはあひての後のにあはぬなりけり
戀をのみ常にするがの山なれば富士のねにのみ泣かぬ日はなし
君により我が身ぞつらき玉だれのみずば戀しと思はましやは

男のはじめて女の許にまかりてあしたに雨のふ
るに歸りてつかはしける

いまぞしるあかぬわかれの曉は君をこひぢに濡るるものとは
かへし

よそにふる雨とこそきけ覺束な何をか人のこひぢといふらむ
つらかりける男に

たえはつる物とはみつつささがにの糸をたのめる心ほそさよ
かへし

うちわたしながき心はやつ橋のくもでに思ふことはたえせじ
思ふ人侍りける女に物のたうびけれどつれなか
りければ遣しける

思ふ人おもはぬ人のおもふ人おもはざらなむおもひ知るべく

かへし

こがらしの森の下草かぜはやみ人のなけきは生ひそひにけり

男のこと女迎ふるを見て親の家に罷り歸るとて

別をば悲しき物とききしかどうしろやすくもおもほゆるかな

題しらす

なきたむる袂こほれるけさ見れば心とけてもきみをおもはず

身をわけてあらまほしくぞ思ほゆる人は苦しといひける物を

雲井にて人を戀しと思ふかなわれはあしべのたづならなくに

人につかはしける

源ひとしの朝臣

浅茅生の小野のしのはら忍ぶれどあまりてなどか人の戀しき

兼覽王

雨やまぬ軒のたまみづ敷しらす戀しきことのまさるころかな

心みじかきやうに聞ゆる人なりといひければ 讀人しらす

伊勢の海にはへてもあまる拷繩たなばなのながき心はわれぞまされる

人につかはしける

色にいでて戀すてふ名ぞたちぬべき涙にそむる袖のこければ

かく戀ふる物としりせば夜よはにはおきて明くればきゆる露ならましを

逢ひもみず歎きもそめすありし時思ふ事こそ身になかりしか

戀のごとわりなき物はなかりけりかつ睦れつつかつぞ戀しま

女のもとに遣しける

わたつ海に深き心のなかりせばなにかは君をうらみしもせむ

みなかみにいのるかひなく涙川うきても人をよそに見るかな

かへし

祈りける水上みなかみさへぞうらめしき今日よりほかに影のみえねば

大輔につかはしける

右大臣

いろふかく染めし袂のいとどしく涙にさへもこさまさるかな

題しらす

讀人しらす

見る時はことごとく見ぬ時はことあり顔に戀しきやなぞ

男のこむとてこざりければ

山里のまきの板戸もささざりきたのめし人を待ちしよひより

はじめて女のもとに遣しける

行く方もなくせかれたる山水のいはまほしくも思ほゆるかな

女につかはしける

人の上のこととしいへば知らぬかな君も戀する折もこそあれ

かへし

つらからば同じ心につらからむつれなき人を戀ひむともせず

女につかはしける

人しれずおもふ心はおほしまのなるとはなしに歎くころかな

男のもとに遣しける

中務

はかなくて同じ心になりにしを思ふがごとはおもふらむやぞ

かへし

源信明

侘しさをおなじ心ときくからに我が身をすてて君ぞかなしき

罷らすなりにける女の人に名たちければ遣しける

さだめなくあだに散りぬる花よりは常磐の松の色をやはみぬ

かへし

讀人しらす

住吉のわが身なりせば年ふともまつよりほかの色をみましや

をとこにつかはしける

にもはかなき事のあやしきは寐なくに夢の見ゆるなりけり

女のあはず侍りけるに
 しらなみのよるよる岸にたちよりてねも見しものを住吉の松
 男に遣しける
 ながらへてあらぬまでにも言の葉の深きはいかに哀なりけるリイ

後撰和歌集 卷第十

戀歌二

女の許にはじめて遣しける
 人をみて思ふおもひはモイある物を空に戀ふるぞイははかなかりけりるイ
 ひとりのみ思へふばイばくるしいかにしておなじ心に人ををしへむ
 藤原忠房朝臣
 紀友則
 源中正
 わが心いつならひてか見ぬ人をおもひやりつつ戀しかるらむ
 まだ年若かりける女につかはしける
 葉を若みほにこそいでねはなすすき下の心にむすばざらめや

人をいひはじむとて

兼 寛 王

あしびきの山下しけくはふ葛のたづねて戀ふる我としらすや

一本

年月をへて忍びていひ侍りける人に

忠 房 朝 臣

隱沼かたぬにしのびわびぬる我が身かな井手の蛙となりやしなまし

女のざうしによるよる立ちよりつつ物などいひ

藤 原 輔 文 仁

て後

阿武隈の霧とはなしによもすがら立ち渡りつつよをもふる哉

文つかはせども返事もせざりける女の許に遣し

ける

讀 人 し ら す

あやしくも厭ふにはゆる心かないかにしてかは思ひやむべき

くにもちが音もせざりければ遣しける

本 院 右 京

ともかくもいふ言の葉の見えぬかないづらは露のかかり所は

題しらす

橘 敏 仲

わび人のそほつてふなる涙川おりたちてこそ濡れわたりけれ

かへし

大 輔

ふちせともこころも知らず涙川おりやたつべき袖のぬるるに

又

敏 仲

こころみになほおりたたむ涙川うれしき瀬にも流れあふやと

わざとにはあらで時々物いひふれ侍りける女の

心にもあらで人にさそはれてまかりにければと

のるものにかきつけて遣しける

藤 原 敦 忠 朝 臣

かかりける人の心をしらつゆのおけるものとも頼みけるかな

あひしりて侍りける女を久しうとはす侍りけれ

ばいといたうなむ佗びはべると人のつけはべり

人をいひはじむとて

兼 覽 王

あしびきの山下しゆくはふ葛のたづねて戀ふる我としらすや

一本年月をへて忍びていひ侍りける人に

忠 房 朝 臣

隠沼かくれぬにしのびわびぬる我が身かな井手の蛙となりやしなまし

女のざうしによるよる立ちよりつつ物などいひ

て後

藤 原 輔 文仁

阿武隈の霧とはなしによもすがら立ち渡りつつよをもふる哉

文つかはせども返事もせざりける女の許に遣し

ける

讀 人 しらす

あやしくも厭ふにはゆる心かないかにしてかは思ひやむべき

くにもちが音もせざりければ遣しける

本 院 右 京

ともかくもいふ言の葉の見えぬかないづらは露のかかり所は

人をいひはじむとて

兼 覽 王

あしびきの山下しゆくはふ葛のたづねて戀ふる我としらすや

一本年月をへて忍びていひ侍りける人に

忠 房 朝 臣

隠沼かくれぬにしのびわびぬる我が身かな井手の蛙となりやしなまし

女のざうしによるよる立ちよりつつ物などいひ

て後

藤 原 輔 文仁

阿武隈の霧とはなしによもすがら立ち渡りつつよをもふる哉

文つかはせども返事もせざりける女の許に遣し

ける

讀 人 しらす

あやしくも厭ふにはゆる心かないかにしてかは思ひやむべき

くにもちが音もせざりければ遣しける

本 院 右 京

ともかくもいふ言の葉の見えぬかないづらは露のかかり所は

題しらす

橘 敏 仲

わび人のそほつてふなる涙川おりたちてこそ濡れわたりけれ

かへし

大 輔

ふちせともこころも知らず涙川おりやたつべき袖のぬるるに

又

敏 仲

こころみになほおりたたむ涙川うれしき瀬にも流れあふやと

わざとにはあらで時々物いひふれ侍りける女の

心にもあらで人にさそはれてまかりにければと

のるものにかきつけて遣しける

藤原教忠朝臣

かかりける人の心をしらつゆのおけるものとも頼みけるかな

あひしりて侍りける女を久しうとはす侍りけれ

ばいといたうなむ咎びはべると人のつけはべり

ければ

藤原顯忠朝臣

鶯のくもるに侘びてなくこゑを春のさがとぞわれはききつる

ふみかよはしける女のこと人にあひぬと聞きて

つかはしける

平時望朝臣

かくばかり常なき世とはしりながら人を遙になにたのみけむ

男のこざりければ遣しける

小町がいとこいあね

我がかどのひとむら薄かりかはむ君が手なれの駒もこぬかな

題しらす

枇杷左大臣

よをうみの沫と消えぬる身にしあれば恨むる事ぞ數なかりける

かへし

伊勢

わたつみと頼めし事のいもあせぬれば我ぞわが身のうらは恨むる

人のもとに遣しける

源等朝臣

あづまぢの佐野の船橋かけてのみ思ひわたるをしる人のなき

人につかはしける

紀長谷雄朝臣

ふしてぬる夢路にだにもあはぬ身はなほ淺ましき現とぞ思ふ

女につかはしける

讀人しらす

天の戸をあけぬあけぬといひなしてそらなきしつる鳥の聲哉

よもすがらぬれて侘びつるつひ唐衣あふさかやまに道まどひして

男につかはしける

思へどもあやなしとのみいはるれば夜の錦のこちこそすれ

女のもとに遣しける

音にのみききこし三輪の山よりも杉の數をばわれぞ見えましにい

おのれを思ひ隔てたる心ありといへる女の返事

に遣しける

兼輔朝臣

難波潟かりつむ蘆のあしづつのひとへも君をわれやへだつる
遠き所にまかりける道よりやむことなき事によ
りて京へ人遣しけるついでに文のはしにかきつ
け侍りける

讀人しらハ

わがごとや君もこふらむ白露のおきてもねても袖ぞかわかぬ
あひしりて侍りける人の許より久しうとはずし
ていかにぞまだいきたりやとたはぶれて侍りけ
れば

つらくとも有らむとぞ思ふ外にても人やけぬると聞かまほしさに
人のもとにしばしばまかりけれどあひ難く侍り
ければ物にかきつけ侍りける

在原業平朝臣

暮れぬとてねて行くべくもあらなくに辿るも歸る優れり

をとこ侍る女をいとせちにいはせ侍りけるを女
いとわりなしといはせければ
元良のみこ

わりなしといふこそ且は嬉しけれおろかならずと見えぬと思へば

女の許より心ざしの程をなむえ知らぬといへり
ければ
藤原興風

我が戀をしらむと思はば田子の浦にたつらむ波の数を數へよ

いひかはしける女の許よりなほざりにいふにこ
そあめれといへりければ
貫之

色ならばうつるばかりも染めてまし思ふ心をえやは見せける
物のたうびける女の許に文遣したりけるに心地

あしとて返事もせざりければ又つかはしける
大江朝綱朝臣
足引のやまひはすともふみかよふ跡をもみぬは苦しきものを

おほつぶねに物のたうびつかはしけるを更にき
き入れざりければ遣しける

元良_イ 貞元 親王

大かたはなぞやわが名のをしからむ昔のつまと人にかたらむ
かへし

おほつぶね

人はいさ我はなき名の惜しければ昔も今もしらずとをいはむ

返事せざりける女の文をからうじてえて
讀人しらす

あと見れば心なぐさのはまちどり今は聲こそきかまほしけれ

同じ所にて見かはしながらえあはざりける女に

かはとみてわたらぬ中に流るるはいはで物おもふ涙なりけり

心ざしありける女に遣しける

橘公頼朝臣

あま雲に鳴きゆく雁の音にのみ聞き渡りつつ逢ふよしもなし

貫之

住の江のなみにはあらねど夜とともに心を君によせ渡るかな

兵衛に遣しける

讀人しらす

見ぬほどに年の變れば逢ふ事のいやはるばると思ほゆるかな

まかり出でて御文つかはしたりければ

中將更衣

今日すぎば死なまし物を夢にても何處をはかと君がとはまし

御かへし

延喜御製

現にぞとふべかりける夢とのみ惑ひしほどやはるけかりけむ

題しらす

藤原ちかぬ

流れてはゆくかたもなし涙川わがみのうらやかぎりなるらむ

在原棟梁

我が戀の數にしとらばしろたへの濱の眞砂もつきぬべらなり

貫之

涙にもおもひの消ゆる物ならばいとかく胸はこがさざらまし

坂上是則

しるしなき思やなぞと蘆たづの音になくまでにあはず佗しき

年久しくかよはし侍りける人に遣しける

貫之

玉の緒のたえて短きいのちもてとしつきながき戀もするかな

題しらす

平定文

我のみや燃えてきえなむ世と共に思もならぬ富士の嶺のごと

かへし

きのめのと

ふじのねの燃え渡るとも如何せむ消ちこそしらね水ならぬみは

心ざせる女の家のあたりにまかりていひいれ侍

りける

貫之

わびわたる我が身は露をおなじくば君が垣根の草にきえなむ

題しらす

在原元方

みるめかる渚なづきやいづこあふごなみ立ちよる方も知らぬわがみは

東宮に鳴門といふ戸のもとに女と物いひけるに

親の戸をさしてゐて入りにければ又のあしたに

遣しける

藤原滋幹

鳴門よりさしいだされし船よりも我ぞよるべもなき心地せし

題しらす

讀人しらす

高砂のみねのしらくもかかりける人のこころを頼みけるかな

長明のみこの母の更衣さとに侍りけるにつかは

しける

延喜御製

外まへにのみまつぞはかなき住の江の行きてさへこそ見まくほしけれ

題しらす

源等朝臣

かけろふに見しばかりにや濱千鳥ゆくへもしらぬ戀に惑はむ
あり所しりながらえあふまじかりける人につか
はしける

藤原兼茂朝臣

わたつみのそこの在所は知りながら潜きていらむ波のまごなき

女のもとに遣しける

橘實利朝臣

つらしともおもひぞはてぬ涙川ながれて人をたのむところは

かへし

讀人しらす

流れてとなにたのむらむ涙川かけ見ゆべくもおもほえなくに

人をいひわづらひて遣しける

平定文

何事を今はたのまむちはやぶる神もたすけぬ我が身なりけり

かへし

おほつぶね

ちはやぶる神も耳こそなれぬらしさまざま祈る年もへぬれば

女の許にまかりたりけるをただにてかへし侍り
ければいひいれ侍りける

貫之

うらみても身こそつらけれ唐衣きていたづらに返ると思へば

あひしりて侍りける人を久しうとはずしてまか

りたりければ門より返し遣しけるに

壬生忠岑

住の江のまつに立ちよる白波のかへる折にやねはなかるらむ

をとこの許より今はこと人あんなればといへり

ければ女にかはりて

讀人しらす

思はむと頼めし事もあるものをなき名をたてでただに忘れね

かへし

春日野のとぶひの野守みし物をなき名といはば罪もこそうれ

題しらす

忘られて思ふなけきの茂るをや身をはづかしの森といふらむ

人の心かはりければ

右

近

思はむと頼めし人はありと聞くいひし言の葉いづちいにけむ

定國卿の朝臣の御息所と清蔭の朝臣とみちのくに

にある所々をつくして歌によみかはしていまは

よむべき所なしといひければ

源清蔭朝臣

さてもなほ籬まがきの嶋のありければ立ちよりぬべく思ほゆるかな

こと女の文を妻めの見むといひけるに見せざりけ侍らすと

れば恨みけるに其文の裏にかきつけて遣しける

讀人しらす

これはかくうらみ所もなき物をうしろめたくは思はざらなむ

久しうあはざりける女に遣しける

源さねあきら

思ひきや逢ひ見ぬ事をいつよりと數ふばかりになさむ物とは

題しらす

藤原治方

世の常の音をしなかねば逢ふ事の涙の色もことにぞありける

大伴黒主

白波のよするいそまを漕ぐ舟のかちとりあへぬ戀もするかな

源うかぶ

戀しさはねぬに慰むともなきをにあやしくあはぬめをも見る哉

源すぐる

年を経ていひわたりける女に

久しくもこひわたるかな住の江の岸に年ふるまつならなくに

藤原清正

逢ふ事のよよをへだつるくれ竹のふしの數なき戀もするかな

かれがたになりにける人に末もみぢたる枝につ

けてつかはしける

讀人しらす

今はてふ心つくばのやま見ればこそ色かはりけれ

女の許より歸りてあしたに遣しける 源重光朝臣

歸りけむ空もしられずをばすての山よりいでし月を見しまに

兼輔朝臣にあひはじめて常にしもあはざりける

程に 清正母

ふりとけぬ君が雪けのしづくゆゑたもとにとけぬ氷しにけり

方ふたがりける頃たがへにまかるとて 藤原有文朝臣

片時もみねば戀しき君をおきてあやしや幾夜ほかに寐ぬらむ

題しらす 大江千古

思ひやる心にとぐふ身なりせばひと日にちたび君はみてまし

忍びて通ひける女の許より狩さうぞく送りて侍

りけるにすれるかりきぬ侍りけるに 元良のみこ

逢ふことは遠山山どりのすり衣すりのかり衣きてはかひなき音をのみぞなく

題しらす あつよしのみこ

深くのみ思ふ心はあしのねのわけても人にあはむとぞおもふ

忍びてあひわたりける人に 藤原忠國

漁火いさりびのよるはほのかにかくしつつありへば戀の下にけぬべし

寛平の帝御ぐしおろさせたまうての頃御帳のめ

ぐりにのみ人はさぶらはせ給ひて近うもめしよ

せられざりければかきて御帳に結びつけける 小八條御息所

たちよらば影ふむばかり近けれど誰かなこそその關をすゑけむ

男のもとに遣しける 土佐

わがそでは名にたつ末の松山ういかそらより波のこえぬ日はなし

月をあはれといふはいむなりといふ人の有りけ

れば

讀人しらす

獨寐の佗しきままに起き居つつ月をあはれといみぞかねつる

男のもとに遣しける

唐錦をしき我が名はたちはてて如何にせよとか今はつれなき

はじめて人にのたまひ遣しける

人づてにいふ言の葉の中よりぞ思ひつくばのやまは見えける

みそかに人を見て遣しける

貫

之

便にもあらぬおわが身ひのあやしきは心をひとにつくるなりけり

人の家より物見に出づる車を見て心づきにおほ

え侍りければたと尋ねとひければいでける家

のあるじと聞きてつかはしける

讀人しらす

ひとづまに心あやなくかけはしの危きものは戀にぞありける

人を思ひかけて心地もあらずやありけむ物もい

はずして日くるればおきもあがらずと聞きてこ

のおもひかけたる女の許よりなどかくすきすき

しくはといひて侍りければ

いはで思ふ心ありそのはまかせに立つ白波のよるぞわびしき

心かけて侍りけれどいひつかむ方もなくつれな

きさまのに見えければつかはしける

ひとりのみ戀ふればくるし呼子鳥聲になき出て君にきかせむ

をとこの女に文つかはしけるを返事もせで絶え

にければ又つかはしける

ふしなくて君がたえにし白糸はよりつき難き物にぞありける

をとこの旅よりまできて今なむまできつきたる

といひて侍りける返事に

くさ枕このたびへつる年月のうきはかへりてうれしからなむ

をとこの程久しうありてまできてみ心のいとつ

らさに十二年の山ごもりしてなむ久しうきこえ

ざりつるといひ入れたりければ呼び入れて物な

どいひて返しつかはしけるが又おともせざりけ

れば

出でしより見えすなりにし月影は又山のはに入りやしにけむ

かへし

足引の山に生ふてふもろかづら諸ともにこそ入らまほしけれ

人を思ひかけて遣しける

平 定 文

濱千鳥たのむをしれと踏みそむる跡うちけつなわれをこす波

かへし

おほつぶね

行く水の瀬毎にふまむ跡ゆるゑに頼むしるしをいづれとか見む

人の許に初めて文遣したりけるに返事はなく^{もい}て

ただ紙をひき結びて返したりければ

源もろあきらの朝臣

つまにおふることなし草を^とみるからに頼む心ぞ數まさりける

かくておこせて侍りけれど宮づかへする人なり

ければいとまなくて又のあしたに常夏の花につ

けておこせて侍りける

讀人しらす

置く露のかかるものとは思へどもかれせぬものは常夏^{なでし}の花

かへし

かれずともいかが頼まむ撫子の花はときはの色にしあらねば

後撰和歌集 卷第十一

戀歌三

女のもとにつかはしける

三條右大臣

名にしおはば逢坂山のさねかづら人にしられでくる山もがな

在原元方

戀しとはさらにもいはじ下紐のとけむを人はそれと知らなむ

讀人しらす

下紐のしるしとするも解けなくに語るが如ごとは戀こひすもある哉

女のいと思ひ離れていふに遣しける

現いまにもはかなきことの侘わしきはねなくに夢とおもふなりけり

みやづかへする女の逢ひ難く侍りけるに

貫之

たむけせぬわかれする身の侘わしきは人目を旅と思ふなりけり

かりそめなる所にはべりける女に心こかはりにける

男のここにてはかくびんなき所なれば心ざしは

ありながらなむえ立ちよらぬといへりければ所

をかへて待ちけるに見えざりければ

女

宿かへて待つにも見えすなりぬればつらき所の多くもある哉

題しらす

讀人しらす

思はむと頼めし人はかはらじを訪はれぬ我やあらぬなるらむ

源みなもとさねあきら頼たのむ事ことなくば死しぬべしといへりけ

れば

中

務

徒いとにたびたび死ぬといふめれば逢ふには何をかへむとすらむ

かへし

源 信 明

死ぬ死ぬと聞く聞くだにも相見ねば命をいつの世にか残さむ

時々みえける男のゐる所のさうじに鳥のかたを

かきつけて侍りければあたりにおしつけはべり

ける

本 院 侍 従

繪にかける鳥とも人を見てしがな同じところを常にとふべく

大納言國經朝臣の家に侍りける女に平定文いと

忍びて語らひ侍りて行未まで契り侍りける頃こ

の女俄に贈太政大臣に迎へられて渡り侍りにけ

れば文だにも通はす方なくなりにつればかの女

の子のいつつばかりなるが本院の西の對たに遊び

ありきけるを呼びよせて母に見せ奉れとてかひ

なに書き付け侍りける

平 定 文

昔せし我がかねごとの悲しきはいかに契りしなごりなるらむ

かへし

讀 人 し ら ず

うつつにて誰ちぎりけむ定めなき夢路に迷ふわれはわれかは

おほやけづかひにて東の方へまかりける程には

じめてあひしりて侍る女にかくやんごとなき道

なれば心にもあらずまかりぬるなど申して下り

侍りけるを後に改め定めらるる事ありてめしか

へされければこの女聞きて喜びながら問ひに遣

したりければ道にて人の心ざし送りて侍りける

くれはとりといふ綾を二むら包みて遣しける

清 原 諸 實

くれはとりあやに戀しくありしかば二むら山もこえずなりにき

かへし

讀人しらす

からころもたつををしみし心こそふたむら山の關となりけめ

人のもとに遣しける

清成が女

夢かとも思ふべけれど覺束な寐ぬに見しかばわきぞかねつる

少將實忠通ひ侍りける所をさりてこと女につき

てそれより春日の使に出で立ちてまかりければもとの女

空しらぬ雨にもぬるる我が身かな三笠の山をよそにききつつ

朝顔の花まへにありけるさうしより男のあけて

出で侍りけるに

讀人しらす

諸共にをるともなしにうちとけて見えにけるかな朝顔のはな

内にまゐりて久しう音せざりける男に

女

ももしきは斧の柄くたす山なれや入りにし人の音づれもせぬ

女の許にきぬをぬぎ置きてとりに遣すとて

伊尹朝臣

すすかやま伊勢をの海士の捨衣しほなれたりと人やみるらむ

題しらす

貫之

いかでなほ人にもとはむ曉のあかぬわかれやなにに似たりと

在原行平朝臣

戀しきさいに消えかへりつつ朝露のけさはおきるむ心地こそせね

讀人しらす

しののめにあかでわかれし袂をぞ露やわけしと人はのいとがむる

平中興

こひしきさいも思ひこめつつあるものを人にしらるる涙なになり

からうじてあへりける女につつむ事侍りて又え

あはず侍りければ遣しける

兼輔朝臣

あふさかの木の下露にぬれしよりわが衣手はいまもかわかず

題しらす

躬

恒

君をおもふ心を人にこゆるぎのいその玉藻やいまもからまし

親ある女に忍びて通ひけるを男もしばしは人に

しられじといひ侍りければ

讀人しらす

なき名ぞと人にはいひて有りぬべし心とはばいかが答へむ

なき名たちける頃

伊

勢

清けれど玉ならぬ身の佗しきはみがける物とイにはぬなりけり

忍びてすみ侍りける女につかはしける

敦忠朝臣

逢ふことをいざほに出なむしの薄すすき忍びはつべき物ならなくに

あひ語らひける人これもかれも包む事ありて離

れぬべく侍りければ遣しける

讀人しらす

逢ひ見ても別るる事のなかりせばかつ物は思はざらまし

人のもとより曉かへりて

閑院左大臣

いつのまに戀しかるらむ唐衣ぬれにしそでのひるまばかりに

貫

之

別れつる程もへなくに白波の立ちかへりても見まくほしきか

女のもとにつかはしける

これまさの朝臣

人しれぬ身はいそけども年をへてなど越えがたきあふ坂の關

かへし

小野好古朝臣女

東路に行きかふ人にあらぬ身はいつかは越えむあふさかの關

女のもとに遣しける

藤原清正

つれもなき人にまけじとせし程に我もあだ名は立ちぞしにける

かれがたになりける男の許に裝束調じて送り

けるにかかるからに疎き心地なむするといへり
ければ

小野遠興がむすめ

つらからぬ中にあるこそ疎しといへ隔て果ててし衣きぬにやはあらぬ

五節ごせつの所にて閑院のおほい君につかはしける
もろまさの朝臣

ときはなる日蔭のかづら今日しこそ心の色にふかく見えけれ

かへし

誰となくかかるおほみに深からむ色をときはにいかが頼まむ

藤壺の人々月夜にありきけるを見て一人がもと

に遣しける

清正

たれとなくおほろに見えし月影にわくる心をおもひしらなむ

左兵衛督師尹朝臣に遣しける

本院兵衛

春をだに待たで鳴きぬる鶯はふるすばかりのこころなりけり

題しらす

兼茂朝臣女

夕されば我が身のみこそ悲しけれいづれのかたに枕さだめむ

在原元方

夢にだにまだ見えなくに戀しきはいつにならへる心なるらむ

壬生忠岑

思ふてふ事をぞねたく古しける君にのみこそいふべかりけれ

戒仙法師

あなこひし行きてや見まし津の國のいまもありてふ浦の初島

やむことなき事によりて遠き所にまかりてた

む月ばかりになむまかり歸るべきといひてまか

りくだりて道よりつかはしける

貫之

月かへて君をば見むといひしかど日だに隔てず戀しきものを

同じ所に宮づかへし侍りて常に見ならしける女
に遣しける

躬

恒

伊勢の海にしほやくあまの藤衣なるとはすれどあはぬ君かな

題しらす

是

即

わたのそこかづきて知らむ君がためおもふ心の深さくらべに
人のをとこにてはべる人をあひしりてつかはし
ける

右

近

からころもかけて頼まぬ時ぞなき人のつまとは思ふものから
人の許にまかれりけるに簾のとにすゑて物いひ
けるを簾を引きあけければいたく騒ぎければま
かりかへりて又のあしたにつかはしける
あらかりし波の心はつらけれどすごしによせし聲ぞこひしき

藤原守正

あひしりて侍りける女の心ならぬやうに見え侍
りければつかはしける

藤原後蔭朝臣俊

いづ方に立ち隠れつつ見よとてか思ひぐまなく人のなりゆく

男の心やうやうかれがたに見えゆきければ

土

佐

つらきをも憂をも外に見しかども我が身にほ近きよにこそ有りけれ

女に心ざしあるよしをいひ遣しければ世の中の

人の心さだめなければ頼み難きよしをいひて侍

りければ

在原元方

淵は瀬になり變るてふ飛鳥川わたり見てこそ知るべかりけれ

題しらす

伊

勢

厭はるる身をうれはしみいつしかと飛鳥川をも頼むべらなり
かへし

贈太政大臣

飛鳥川せきてとどむるものならば淵瀬になると何かいはせむ

右大臣

あしたづの澤邊に年はへぬれどもこころは雲の上のみにみこそ

かへし

芦鶴の雲井にかかる心あらばよをへて澤に住まずぞあらまし

消息つかはしける女のまたこと人に文つかはす

と聞きて今は思ひたえねといひ送りて侍りける

返事に

贈太政大臣

松山につらきながらも波こさむことはさすがに悲しきものを

宮づかへし侍りける女程久しくありて物いはむ

といひ侍りけるに遅くまかり出でければ

枇杷左大臣

宵のまにはや慰めよいそのかみふりにし床もうちはらふべく

かへし

伊

勢

わたつみとあれにし床を今さらにはらはば袖や沫きえとうきなむ

心ざしありていひかはしける女のもとより人數

ならぬやうにいひ侍りければ

長谷雄朝臣

汐のまに漁あきする蟹かまもおのがよよかひありとこそ思ふべらなれ

題しらす

贈太政大臣

あぢきなくなどかまつ山波こさむことをば更に思ひはなるる

かへし

伊

勢

岸もなく汐しみちなばまつ山をしたにて波はこさむとぞ思ふ

まもりをおきて侍りける男の心かはりにければ

其まもりを返しやるとて

伊衡朝臣の女いまき

よと共共にに歎きこりつむ身にしあればなぞ山守の有るかひもなき

人の心つらくなりにければ袖といふ人をつかひ
にて

讀人しらす

人しれぬ我が物おもひの涙をば袖につけてぞ見すべかりけら

文などおこする男ほかざまになりぬべしと聞き

て

藤原真忠が妹

山のはにかかる思のたえざらば雲井ながらもあはれと思はむ

町尻の君に文つかはしたりける返事に見つとの

みありければ

もろうちの朝臣

なき流す涙のいとどそひぬればはかなきみづも袖身はいぬらしけり

題しらす

源たのむ

夢のごとはかなき物はなかりけり何とて人に逢ふとみつらむ

心ざし侍りける女のつれなきに

讀人しらす

思ひねのよなよな夢にあふことをただ片時のうつつともがな

かへし

時のまのうつつをしのぶ心こそはかなき夢にまさらざりけれ

題しらす

黒主

玉津島ふかき入江をこぐふねのうきたる戀もわれはするかな

紀内親王三品かゝい

津の國のなにはたたまく惜しみこそすくもたく火の下にこがるれ

人の許にまかりていれざりければすゐ簀子にふしあ

かして歸るとていひいれ侍りける

讀人しらす

夢路にもやどかす人のあらませば寐覺に露ははらはざらまし

かへし

涙川ながすねざめもあるものをはらふばかりの露やなになりるい

心ざしはありながらえあはざりける人につかはしける

みるめ刈るかたぞあふみになしと聞く玉藻をさへや蟹は潜かぬかへし

名のみして逢ふ事なみの繁きまにいつか玉藻を蟹はかづかむ

心ざしありて人にいひかはし侍りけるをつれな

かりければいひわづらひて止みにけるを思ひ出

でてしきりにいひ送りける返事に心ならぬさま

なりといへりければ

葛城やくめぢの橋にあらばこそ思ふこころをなかぞらにせめ

人のもとにつかはしける

右大臣

隠沼にすむ鴛鴦の聲たえずなけどかひなきものにぞ有りける

釣殿のみこに遣しける

陽成院御製

筑波根の嶺より落つるみなのがは戀ぞつもりて淵となりける

相しりて侍りける人のまうでこすなりて後心に

もあらず聲をのみきくばかりにてまた音もせず

侍りければ遣しける

讀人しらす

雁が音のくもる遙にきこえしは今ほかぎりの聲にぞありける

かへし

兼覽王

今はとて行きかへりぬる聲ならば追風にてもきこえましやは

男のけしきやうやうつらけに見えければ

小町

心からうきたる船にのりそめてひとひも波にぬれぬ日ぞなき

男の心つらく思ひかれにけるを女なほざりにな

どか音もせぬといひ遣したりければ

讀人しらす

忘れなむと思ふ心のやすからばつれなき人をうらみましやはざらまし

宵に女にあひて必ず後にあはむと誓言ちか言をたてさ

せてあしたに遣しける

藤原滋尠

千早振神ひきかけて誓ひてしこともゆゆしくあらがふなゆめ

院のやまとに扇つかはすとて

右大臣

おもひには我こそ入りて惑はるれあやなく君や涼しかるべき

兼通の朝臣かれがたになりて年こえてとぶらひ

て侍りければ

元平の親王の母

あらたまの年もこえぬるまつ山のなみの心はいかがなるらむ

もとの女にかへりすむとききて男のもとに遣し

ける

讀人しらす

わがためはいとど淺くやなりぬらむ野中の清水深きまされば

女のもとに遣しける

源中正

あふみちを案内しるべなくとも見てしがな關こなたの此方は佗しかりけり

かへし

下野

道しらでやみやはしなぬ逢坂の關のあなたはうみといふなり

女の許にまかりたるにはや歸りねとのみいひけ

れば

讀人しらす

つれなきを思ひしのぶのさね蔓かづらはてはくるをも厭ふなりけり

あつよしのみこの家にやまといふ人につかは

しける

左大臣

いまさらに思ひ出でじと忍ぶるを戀しきにこそ忘れわびぬれ

いひかはしける女の今は思ひ忘れねといひ侍り

ければ

紀長谷雄朝臣

わが爲は見るかひもなし忘草わするばかりの戀にしあらねば

忍びて通ひける人に

藤原有好

あひみてもつつむ思の佗しきは人まにのみぞ音はなけれける

物いひける男いひわづらひていかがはせむいな

ともいひはなちてよといひ侍りければ

讀人しらす

小山田のなはしろみづは絶えぬとも心の池のいひははなたじ

方たがへに人の家に人を具してまかりて歸りて

遣しける

千代へむと契りおきてし鏡松のねざしとめてし宿はわすれじ

物いひける女に蟬のからを包みて遣すとて

源重光朝臣

これをみよ人もすさめぬ戀すとて音をなくむしのなれる姿を

人のもとより歸りまうできて遣しける

坂上是則

逢ひ見ては慰むやとぞ思ひしになごりしもこそ戀しかりけれ

後撰和歌集 卷第十二

戀歌四

女につかはしける

敏行朝臣

我が戀のかずをかぞへば天の原くもりふたがりふる雨のごと

忘れにける女を思ひ出でてつかはしける

讀人しらす

うちかへし見まくぞほしき古里のやまと撫子いろやかはれる

女につかはしける

枇杷左大臣

山彦の聲にたてても年はへぬ我がものおもひを知らぬ人きけ

身よりあまれる人を思ひかけて遣しける

紀友則

玉藻たまもかるかま蟹にはあらねどわたつみの底ひもしらす入る心かな

返事侍らざりければ又かさねて遣しける

みるもなくめもなき海の濱磯に出てかへるがへるもうらみつる哉

あだに見え侍りける男に

讀人しらす

こりすまの浦の白波たちいでてよるほどもなく歸るばかりか

相知りて侍りける人の近江の方へ罷りければ

關こえてあはづの森のあはずとも清水に見えし影をわするな

かへし

近けれど何かはしるしあふさかの關のほかぞと思ひたえなむ

つらくなりにける男のもとに今はとて装束など

返し遣すとて

平なかきが女

今はとて梢にかかるうつせみのからを見むとは思はざりしを

かへし

城 巨宗城

忘らるる身をうつせみのからころも返すはつらき心なりけり

物いひける女のがみをかりてかへすとて 読人しらす

影にだに見えもやすると頼みつるかひなくこひをます鏡かな

男の物などいひつかはしける女の田舎の家さま

かりてたたきけれども聞きつけずやありけむ門

もあけずなりにければ田のほとりにかへるの鳴

きけるを聞きて

足引の山田のそほづうちわびて一人かへるの音をぞなきぬる

文遣しける女の母のこひをし戀ひばといへりけ

るが年頃へにければ遣しける

種はあれどあふ事難き岩の上のまつにて年をふるはかひなし

女につかはしける 贈太政大臣

ひたすらに厭ひ果てぬる物ならば吉野の山にゆくへ知られじ

かへし 伊 勢

我が宿と頼む吉野に若しいらば同じかざしをさしこそはせめ

題しらす 読人しらす

くれなるに袖をのみこそ染めてけれ君をうらむる涙かかりて

つれなく見えける人に遣しける

紅になみだうつると聞きしをばなどいつはりとわれ思ひけむ

かへし

くれなるに涙し濃くばみどりなる袖も紅葉と見えましものを

あひすみける人心にもあらで別れにけるが年月

をへてもあひ見むと書きて侍りける文を見いで

て遣しける

いにしへの野中の清水みるからにさしぐむものは涙なりけり
思ふ事侍りて男の許に遣しける

あま雲のはるる夜もなくふるものは袖のみ濡るる涙なりけり
方ふたがるとて男のこざりければ

あふことのかたふたがりて君こすば思ふ心のたがふばかりぞ
相語らひける人の久しう來ざりければ遣しける

常磐にと頼めし事はまつ程の久しかるべき名にこそありけれ
題しらす

濃さまさる涙の色もかひぞなき見すべき人のこの世ならねば
女のもとにつかはしける

すみよしの岸にきよする沖つ波まなくかけても思ほゆるかな
かへし

伊 勢

住の江のめにちかからば岸にゐて波の數をもよむべきものを
つらかりける人の許に遣しける

戀ひて經むと思ふ心のわりなさは死^きにても知れよ忘れ形見に
かへし

贈 太政大臣

若もやとあひ見む事を頼まずはかくする程^ふにまづぞけなまし
題しらす

讀人しらす

逢ふとだにかたみに見ゆる物^夢ならば忘るる程もあらまし物を
おとにのみ聲をきくかなあしびきの山下水にあらぬものから

秋霧の立ちたるつとめていとつらければ此度ば
かりなむいふべきといへりければ

伊 勢

秋とてやはかぎりの立ちぬらむ思ひにあへぬ物ならなくに
心のうちに思ふ事やありけむ

見し夢の思ひ出らるるよひごとには言はぬを知るは涙なりけり

題しらす

讀人しらす

白露のおきてあひみむ事よりは衣かへしつつ寐なむとぞ思ふ

人の許につかはしける

言の葉はなけなる物といひながら思はぬためは君もしるらむ

女のもとに遣しける

朝忠朝臣

白波のうち出づる濱の濱千鳥あとやたづぬるしるべなるらむ

女につかはしける

大江朝綱朝臣

おほしまに水をはこびし早船のはやくも人にあひ見てしがな

伊勢なむ人に忘られて歎き侍ると聞きてつかは

しける

贈太政大臣

ひたぶるに思ひな侘びそふるさるる人の心はそれよ世のつね

かへし

伊

勢

世の常の人の心をまだ見ねばなにかこのたび消ぬべきものを

淨藏くらまの山へなむ入るといへりければ

平中興が女

墨染のくらまのやまに入る人はたどるたどるも歸りきななむ

あひしりて侍りける人の稀にのみ見えければ

伊

勢

日をへても影にみゆるは玉蔓つらきながらも絶えぬなりけり

わざとにはあらず時々物いひ侍りける女程久し

う問はず侍りければ

讀人しらす

高砂のまつをみどりと見しことは下の紅葉を知らぬなりけり

かへし

時わかぬ松のみどりもかぎりなきおもひには猶色やもゆらむ

文かはすばかりにて年へ侍りける人に遣しける

水鳥のはかなき跡に年をへて通ふばかりのえにこそ有りけれ
かへし

波の上にあとやはみゆる水鳥のうきてへぬらむ年にけむいはかずかは
せうそこ遣しける女の許よりいな舟のといふ事
を返事にいひて侍りければ頼みていひ渡りける
に猶あひ難きけしき侍りければしばしとありし
をいかなればかくはといへりける返事につかは
しける

ながれよる瀬々の白波淺ければとまるいな舟かへるなるべし
かへし

最上川ふかきにもあへずいな舟の心かろくもかへるなるかな
いと忍びて語らふ人のおろかなるさまに見えけ
三條右大臣

れば

讀人しらす

花薄うすきほにいづることみなき物をまだき吹きぬるあきの風かな

心ざしおろかに見えける人につかはしける
なかきが女

待たざりし秋はきぬれど見し人の心はよそになりもゆくかな

かへし
源是茂朝臣

君をおもふ心ながさは秋の夜にいづれまさると空にしらなむ

ある所にあふみといふ人をいとしのびて語らひ

侍りけるを夜あけてかへりけるを人見てささや

きければその女の許につかはしける
坂上つねかけ

鏡山あけてきつれば秋ぎりのけさや立つらむあふみてふ名は

あひしりて侍る女の人にあだ名たち侍りけるに

遣しける
平まれよの朝臣

枝もなく人にをらるる女郎花ねをだにのこせ植ゑしわがため

人の許にまかりて侍るに呼び入れねば簀子すのこにふ

しあかしてつかはしける

藤原成國

秋の田のかりそめぶしもしてけるが徒いとちいねをなにつままし

平かねきがやうやうかれがたになりにつままし

しける

中

務

秋風の吹くにつけてもとはぬかな萩の葉ならば音はしてまし

年月をへて消息し侍りける人につかはしける 讀人しらす

君見すていくよ經ぬらむ年つきのふるとともにもおつる涙か

女につかはしける

なかなかに思ひかけては唐衣身になれぬをぞうらむべらなる

かへし

うらむともかけてこそみめ唐衣身に馴れぬればふりぬとかきく
人につかはしける

歎けどもかひなかりけり世の中に何にくやしく思ひそめけむ

忘れがたになり侍りける男に遣しける

承香殿中納言

こぬ人をまつの葉にふる白雪の消えこそかへれくゆる思ひに

忘れ侍りにける女に遣しける

讀人しらす

菊の花うつる心をおくしもにかへりぬべくもおもほゆるかな

かへし

今はとてうつりはてにし菊の花かへる色をばたれか見るべき

人の女にいと忍びて通ひ侍りけるにけしきを見

て親のまもりければ五月長雨の頃遣しける

ながめしてもりも佗びぬる人め哉いつか雲まのあらむとすらむ

まだあはず侍りける女の許に死ぬべしといへり
ければ返事にはや死ねかしといへりければ又遣
しける

同じくば君とならびの池にこそ身を投げつとも人にきかせめいいはれめ
女につかはしける

陽炎かぶらのほのめきつれば夕暮のゆめかとのみぞ身をたどりつる
かへし

ほの見ても目馴れにけりと聞くからにむかひ臥返こそしなまほしけれ
せうそこしばしば遣しけるを父母侍りてせいし

侍りければえ逢ひ侍らで
源よしの朝臣
あふみてふかたの案内しるべもえてしがなみるめなき事ゆきてうらみむ
かへし

春澄善繩朝臣の女

逢坂のせきとめもいらるる我なればあふみてふらむかたも知られず
女のもとに遣しける
よしの朝臣

あしびきの山した水のこがくれてたぎつ心をせきぞかねつる
かへし
讀人しらす

木がくれてたぎつ山水何れかは目にしもみゆる音にこそきけ
人の許より歸りて遣しける
貫之

曉のなからましかば白つゆのおきてわびしきわかれせましや
かへし
讀人しらす

おきてゆく人の心をしらつゆのわれこそまづは思ひ消えぬれ
女の許に男かくしつつよをやつくさむ高砂のと

いふことをいひ遣したりければ
高砂のまつといひつつ年をへてかはらぬ色ときかばたのまむ